

秋田市

# 湊城跡

—秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴う発掘調査報告書（平成20年度調査区）—

2009.10 秋田市教育委員会

## 序

秋田市は、秋田市土崎港地内に秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）を計画したことから、周知の遺跡である「湊城跡」の保護について協議を重ね、平成17年度から工事着手前に発掘調査を実施して、遺跡を記録保存することとし、平成20年度で4年目となりました。

調査の結果、江戸時代の溝跡や土坑などが発見され、当時の土地利用が判明し、地域の歴史を考える上で貴重な成果を得ることができました。

本報告書は、平成20年度調査区の調査結果をまとめたもので、文化財保護のため、さらには研究資料として広く活用していただければ、幸いに存じます。

刊行にあたり、調査にご協力いただきました関係各位の皆様に感謝申し上げますとともに、今後とも、埋蔵文化財の保護につきまして、ご理解いただきますようお願い申し上げます。

平成21年10月

秋田市教育委員会  
教育長 芳賀龍平

## 例　　言

- 1 本報告書は、秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴う漆城跡（秋田市土崎港中央六丁目地内）の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本事業は、事業主体者が秋田市建設部道路建設課、業務受託者が株式会社 本郷建設工務所、調査担当者が秋田市教育委員会文化振興室となって実施した。本発掘調査経費については、事業主体者である秋田市建設部道路建設課が負担した。なお、平成19年度に実施した確認調査は、秋田市教育委員会が調査主体となり、国庫補助金および県費補助金の交付を受けて行った。
- 3 本報告書は石郷岡誠一、安田忠市の指導のもと、執筆・編集および写真撮影は伊藤才城が行った。
- 4 出土遺物の陶磁器類について、有田町歴史民俗資料館の村上伸之氏に鑑定をお願いした。
- 5 発掘調査、整理作業の過程で下記の各氏より指導、助言を賜った。（敬称略・順不同）  
文化庁、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、秋田県立博物館、船木義勝、村上義直

## 凡　　例

- 1 図中には下記の略記号を用いた。  
SA—柱列、SD—溝跡、SK—土坑、P—ビット、SX—歓跡
- 2 圖中の方位は、すべて真北を示す。
- 3 図中の地図には、秋田市管内図1/50,000、同1/25,000、都市計画図1/3,000を使用した。
- 4 本文中の遺物については、陶磁器・土製品・瓦・金属製品・木製品の基礎分類ごとに記述した。
- 5 実測図の中で、青磁は「青磁」の文字と [REDACTED]、鉄釉は「鉄釉」の文字と [REDACTED] の網掛けで図示し、白磁は「白磁」の文字のみで示した。
- 6 本文中の陶磁器の生産地については、国内産は肥前系・瀬戸美濃系など主要な大規模生産地（地方）に関してその生産地産の製品を主とし、それに直接技術的影響を受けた周辺および地方の窯の製品も含め「系」として示した。また、より具体的な生産地として窯を限定できるものについては、秋田県の在地窯である寺内窯のように記述した。  
なお、肥前系陶磁器の産地同定および年代については有田町歴史民俗資料館の村上伸之氏に鑑定を依頼したが、報告文の内容についてはご教示をもとに執筆を行った担当者に責がある。

## 目 次

序

例 言

凡 例

第1章 調査の概要 .....	1
第1節 調査の経過 .....	1
第2節 発掘調査の経過 .....	1
第3節 整理作業の経過 .....	2
第2章 遺跡の位置と環境 .....	3
第1節 地理的環境 .....	3
第2節 歴史的環境 .....	3
(1) 周辺の遺跡 .....	3
(2) 安東氏と湊城跡の概要 .....	9
第3章 調査の方法と成果 .....	12
第1節 調査の方法 .....	12
第2節 層序 .....	12
第3節 遺構と遺物 .....	15
(1) 第Ⅲ層面検出の遺構・遺物 .....	15
(2) 第Ⅳ、V層面検出の遺構・遺物 .....	21
(3) 第出土遺物属性表および実測図 .....	27
第4章 まとめ .....	34
第1節 検出遺構とその年代について .....	34
第2節 出土遺物について .....	34
第3節 湊城について .....	35

写真図版

報告書抄録

## 第1章 調査の概要

### 第1節 調査の経過

秋田市建設部道路建設課は、土崎駅の利便性を図るため、秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）を秋田市土崎港中央三丁目・五丁目・六丁目地内に計画した。しかし、当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「湊城跡」の範囲内であることから、秋田市教育委員会との間で開発に伴う事前協議を行った。協議の結果、平成19年12月21日付けで秋田市教育委員会に埋蔵文化財事前調査の依頼があった。これを受けて秋田市教育委員会は、平成20年3月18日に分布調査による現況確認と試掘による範囲確認調査を実施し、江戸時代の遺構・遺物を確認した。

そして、平成20年6月2日付けで秋田市建設部道路建設課から秋田県教育委員会に土木工事等のための発掘調査に関する通知書（文化財保護法第94条）が提出された。これに対し、範囲確認調査の結果に基づき平成20年6月12日付け教生-580で秋田県教育委員会より、工事は「恒久的な建築物、道路その他の工作物を設置する場合」に該当するため、事業予定地に対して発掘調査条件の通知があった。

これらのことと踏まえて、湊城跡の保護について協議した結果、事業主体者が秋田市道路建設部（担当課：道路建設課）、調査担当者が秋田市教育委員会（担当課：文化振興室）となり、平成20年度に発掘調査、平成21年度に整理作業を行うこととした。また、費用負担については事業主体者が負担し、発掘調査・整理作業の調査に関わる部分以外は、業務委託することとした。発掘調査は平成20年8月7日付けで事業主体者の秋田市長と調査担当者の秋田市教育委員会、業務受託者の株式会社 本郷建設工務所の3者で、整理作業は平成21年5月29日付けで同3者で協定書を結び、事業を実施した。

### 第2節 発掘調査の経過

#### 発掘調査（平成20年度）

平成20年8月25日から調査を開始した。9月3日、近代造成土である第Ⅰ～Ⅱ層を除去し、第Ⅲ層上部で江戸時代の遺構・遺物を確認した。9月19日から第Ⅳ層面の遺構精査を開始した。10月8日に遺構精査・記録化が終了し、全工程を終了した。

#### 発掘調査体制

調査期間 平成20年8月25日～10月8日

調査面積 270.0m<sup>2</sup>（調査対象面積3,963.76m<sup>2</sup>）

事業主体者 秋田市建設部

調査担当者 秋田市教育委員会

調査体制 文化振興室 室長 石郷岡 誠一

　　参事 赤川 衛

　　室長補佐 加藤 隆子

#### 文化財担当

副参事 安田 忠市

主席主査 西谷 隆（調査担当）

主査 進藤 靖（調査担当）

主　事　　鎌田　英智

主　事　　伊藤　才城（調査担当・主務者）

業務受託者　株式会社　本郷建設工務所

調査作業員　伊藤弘義、伊藤満、千葉隆樹、佐藤兼雄、石川巖、鈴木銀一

鈴木長司、三浦吉司、佐々木昇三、鈴木慶子、鈴木鈴子

長尾景元、須田ゆき子

### 第3節 整理作業の経過

#### 整理作業（平成21年度）

平成21年6月1日から出土遺物の洗浄を開始した。6月4日から7月17日までに室内整理作業を実施した。接合（6月上旬）、注記（6月上旬）、実測（6月中旬）、トレース（6月下旬）、写真撮影（7月上旬）、版下作成（7月中旬）、編集作業（7月～9月）を実施し、印刷所へ入稿した。なお、6月25日に有田町歴史民俗資料館の村上伸之氏から陶磁器類の鑑定をしていただいた。10月21日までに校正・製本を実施し、全工程を終了した。

#### 整理作業体制

作業期間　平成21年6月1日～平成21年10月21日

事業主体者　秋田市建設部

調査担当者　秋田市教育委員会

調査体制　文化振興室　室長　石郷岡　誠一

　　参事　赤川　衛

　　室長補佐　加藤　隆子

#### 文化財担当

　　副参事　安田　忠市

　　主席主査　西谷　隆

　　主　　査　進藤　靖

　　主　　事　神田　和彦

　　主　　事　伊藤　才城（整理担当）

業務受託者　株式会社　本郷建設工務所

整理作業員　千葉隆樹、岩谷みゆき、今野祥子、田原瑞穂

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

漆城跡は、秋田平野を流れる雄物川河口部（秋田運河）の右岸、標高4～7mの地点に位置している（第1図）。秋田市街地北部の秋田市土崎港中央三・五・六丁目地内で、北緯 $39^{\circ}45'26''$ 、東経 $140^{\circ}4'16''$ （世界測地系：X=-26,661、Y=-65,304）の土崎神明社を中心とした東西600m、南北500mの範囲で、現在市街地となっている（第2図、図版1）。平成20年度調査区は、遺跡の中心から北東へ約200mの地点である。

遺跡は、地形分類では砂丘地にあたる（経済企画庁総合開発局国土調査課編1966、第3図）。秋田市では、このような砂丘地は海岸線と並行に幅2～4kmにわたって分布し、この延長は八郎潟南部まで続いている。ほんどうは被覆砂丘である。遺跡が所在する砂丘地は土崎砂丘地と呼ばれ、南北を旧雄物川と新城川に区切られた土崎を中心とした砂丘地で、一部に標高20m前後の高位の砂丘はあるが、大部分は10m前後の低位の砂丘からなっている。土崎砂丘地で特徴的なことは、土崎市街地と新日本石油加工（株）秋田事業所の間に幅500～600mの旧河道がみられる。これは雄物川の旧河道と考えられ、北側は秋田市飯島穀丁の集落まで広がり、湾状の形状を呈している。土崎砂丘地の旧地形が湾状の形状を呈していることは、遺跡の立地として注意すべき点である。

### 第2節 歴史的環境

#### （1）周辺の遺跡

秋田市教育委員会が昭和61年から63年に実施した『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書』（秋田市教育委員会1989）および『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書一改訂版一』（秋田市教育委員会2002）に基づいて、漆城跡周辺の遺跡について概観する。

主要な中世遺跡としては、漆城跡から約2.3km北の新城川左岸に穀丁遺跡（15世紀代）、約1.7km南の旧雄物川下流域右岸に後城遺跡、約2.2km南に秋田城跡、約5.3km南に下野原遺跡が所在し、雄物川下流域右岸に中世の関連遺跡が集中している（第1図）。

穀丁遺跡は、本格的な発掘調査は行われていないが、工事中に遺物が発見された（庄内1982）。中国産青磁（碗2点）、瀬戸美濃系陶器（花瓶1点）、須恵器系陶器（擂鉢1点）、茶臼1点、鉄鍋1点、砥石1点などが出土した。中国産青磁は15世紀代、国内産陶器は15世紀中葉～後葉に位置づけられると考えられている（神田2006）。後城遺跡は、掘立柱建物跡・井戸跡・竪穴造構・土壤墓・貯水施設と考えられる大型円形竪穴造構などが検出されている（小松他1978、伊藤2003a・2005）。遺物は、中国産陶磁器（青磁・白磁・染付）、国内産陶器（瀬戸美濃系・須恵器系・越前系・肥前系）などが出土している。年代は13世紀～16世紀末に渡るが、主体は14世紀後半～16世紀末である。秋田城跡は古代城柵官衙遺跡であるが、瀬ノ木・大小路・勅使館地区で中世の遺構・遺物が確認されている。掘立柱建物跡・井戸跡・竪穴造構・鐵治炉跡・土壤墓などが確認され、かわらけ、中国産青磁（龍泉窯系・同安窯系）、白磁、須恵器系陶器などが出土しており、年代は12世紀末～13世紀中葉頃に位置づけられる（小松他1983・1993・1997・1998、小松1997、伊藤2003b）。下野原遺跡は、掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡・土坑などが検出され、須恵器系陶器、中国産青磁（龍泉窯系）、白磁などが出土し、12世紀後葉～14世紀中葉頃に位置づけられる（伊藤2003c）。

葉頃の集落跡である（小松他1979、神田2003・2005）。

主要な近世遺跡としては、湊城から約6km南東に久保田城跡が所在する。久保田城は秋田藩主佐竹氏12代約270年間の居城で、現在の千秋公園一帯である。慶長7年（1602）に常陸国水戸城（茨城県水戸市）から秋田に転封された佐竹義宣（1570～1633）は、当初旧領主秋田実季（1576～1659）の居城であった土崎湊城に入城した。しかし、湊城は狭小の平城であることから新城を築くこととなり、慶長8年（1603）に着工し、同9年（1604）に湊城を破却し、久保田城へ移ったという経緯がある。

その他、湊城跡周辺には、寺子山遺跡（2：縄文）、県立郷学校遺跡（3：縄文）、高野遺跡（6：奈良・平安）、菅江真澄墓（7：近世）、児桜貝塚（8：縄文）、寺内焼窯跡（9：近世）、神屋敷遺跡（10）などがあり、雄物川右岸の砂丘丘陵および微高地に周知の遺跡が存在する（第4図）。

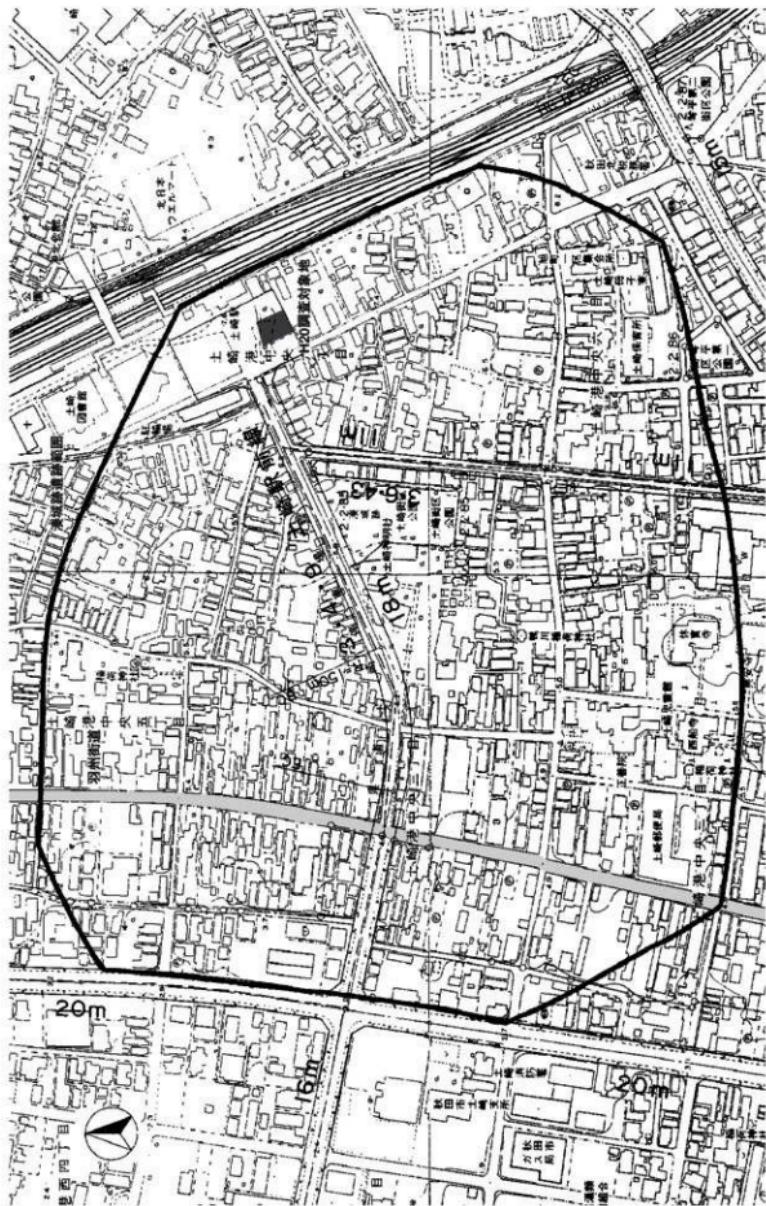
#### 【引用文献】

- 秋田市教育委員会 1989 「秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書」
- 秋田市教育委員会 2002 「秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書－改訂版－」
- 伊藤武士 2003a 「秋田市後城遺跡－中世の湊町－」「中世出羽の諸様相－寺院・生産・城館・集落－」東北中世考古学会第9回大会（秋田大会）資料集 pp.99-108
- 伊藤武士 2003b 「秋田市秋田城跡－中世秋田城周辺－」「中世出羽の諸様相－寺院・生産・城館・集落－」東北中世考古学会第9回大会（秋田大会）資料集 pp.224-236
- 伊藤武士 2005 「秋田湊と湊安東氏の城館」「海と城の中世」東北中世考古学叢書4 高志書院 pp.109-128
- 神田和彦 2003 「秋田市下タ野遺跡－雄物川下流域における中世前期の集落－」「中世出羽の諸様相－寺院・生産・城館・集落－」東北中世考古学会第9回大会（秋田大会）資料集 pp.212-223
- 神田和彦 2005 「雄物川下流域 中世前期の集落－下タ野遺跡－」「海と城の中世」東北中世考古学叢書4 高志書院 pp.195-204
- 神田和彦 2006 「秋田県中世考古学会の現状と課題－秋田平野における中世遺跡の展開を中心として－」「遺跡研究の方法－東北中世考古学の12年－」東北中世考古学会第12回研究大会資料集 pp.62-70
- 経済企画庁総合開発局国土調査課編 1966 「土地分類基本調査 秋田 地形・表層地質・土壤」
- 小松正夫 1997 「中世秋田城の行方－高清水圖の考古学的見地から－」「倉田芳郎先生古希記念 生産の考古学」同成社 pp.195-204
- 小松正夫他 1978 「後城遺跡発掘調査報告書」秋田市教育委員会
- 小松正夫他 1979 「下タ野遺跡発掘調査報告書」秋田市教育委員会
- 小松正夫他 1983 「昭和57年度秋田城跡発掘調査概報」秋田市教育委員会
- 小松正夫他 1993 「平成4年度秋田城跡発掘調査概報」秋田市教育委員会
- 小松正夫他 1997 「平成8年度秋田城跡発掘調査概報」秋田市教育委員会
- 小松正夫他 1998 「平成9年度秋田城跡発掘調査概報」秋田市教育委員会
- 庄内昭男 1982 「秋田市飯島穀丁出土の中世遺物について」「秋田県立博物館研究報告」7 pp.95-102

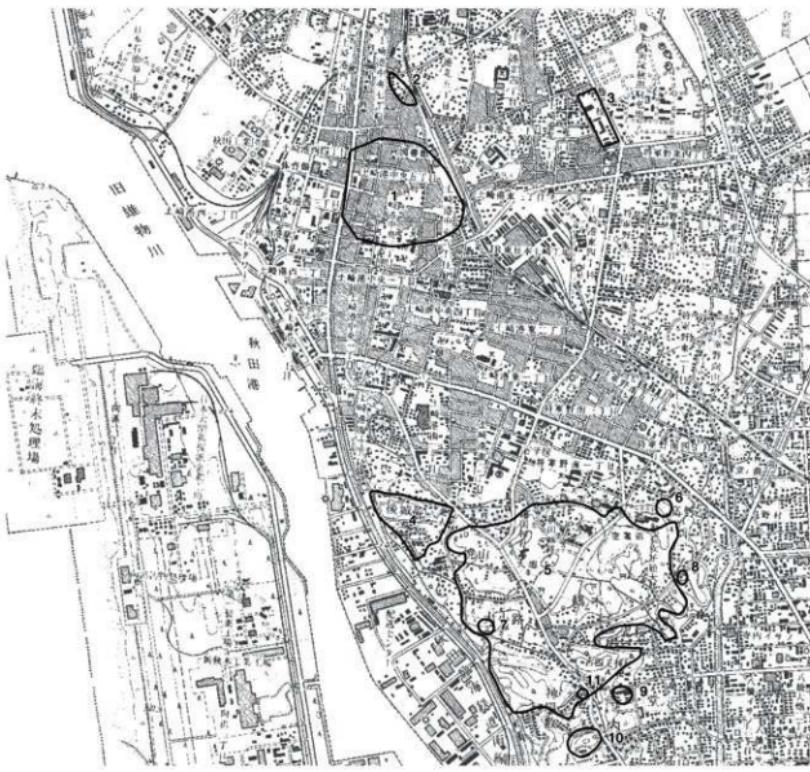


第1図 遺跡位置図 (S=1/50,000)

第2図 滝城跡周辺 (S=1/3,000)







第4図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

表1 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	所在地	時代	遺構・遺物
1	濱城跡	城郭	秋田市土崎港中央三丁目他	中世・近世	柱列、建物跡、溝跡、井戸跡、土坑、燒土遺構、集石造構、散石状遺構、ビット：土器、陶器、磁器、土製品、木製品、石製品、金銀製品、瓦・瓦貨、動物依存体
2	寺小山遺跡	遺物包含地	秋田市土崎港中央七丁目	縄文	石鍬
3	県立聾学校遺跡	遺物包含地	秋田市土崎港北二丁目17番	縄文	縄文土器、石器
4	後城遺跡	集落跡	秋田市寺内坂城	奈良・平安・中世	土塙墓、土塙、井戸跡、住居跡：土器類、須恵器、古漚戸、越前焼、珠洲系中世陶器、青磁、白磁、古鉄、鉄製品、木製品、宝鏡印塔、掘立柱建物跡、堅穴住居跡、菜地、柱列、井戸跡、鎌治炉跡等；縄文土器、石器、石製品、土器類、須恵器、赤褐色土器、漆紙、木製品、鉄製品、木簡等
5	秋田城跡	城柵・城館 (国指定)	秋田市寺内大畠飽	縄文・奈良・平安・中世	須恵器
6	高野遺跡	遺物包含地	秋田市寺内高野	奈良・平安	須恵器
7	善江真澄墓	墓地（市指定）	秋田市寺内大小路	近世	
8	梵桜貝塚	貝塚	秋田市寺内紀板三丁目	縄文	貝塚 縄文土器、石鍬、刻線理
9	寺内燒窯跡	窯跡	秋田市寺内堂ノ沢二丁目	近世	陶器窯跡、瓦窯跡、焼瓦窯、陶器物原、磁器物原：近世陶磁器、瓦、煉瓦、木製品
10	神屋敷遺跡	古墳擬定地	秋田市寺内神屋敷		直径7m、高さ1.5m程度の土盛り3基
11	根萱山遺跡	古墳擬定地	秋田市寺内神屋敷		径6m程高さ2mの円墳状の高まり

## (2) 安東氏と湊城跡の概要

安東氏と湊城跡について、文献史料や絵図などにみられる記載を整理し、概要と変遷について述べる。

『秋田家文書』所収の「秋田家系図」<sup>甲11</sup>によれば、安東氏は前九年の役（1051～1062）で討伐された安倍貞任の子・高星が青森県津軽地方の藤崎に逃れ、その後、子孫の貞秀が安東太郎と称し、当家の家名としたことに始まるとされる。やがて、愛秀の頃（鎌倉時代末頃か）に安東氏は十三湊を本拠とした。その後、盛季（？～1414）は下國家を興し、盛季の弟・鹿季（？～1423）は、盛季の命により、兵200余騎を率いて、秋田の湊を伐ち、湊家の元祖となったとされる。また、「南部世譜附録」によれば、応永17年（1410）に、安東鹿季は山北刈和野（現・大仙市刈和野）で南部守行と戦った記録がある。この他、秋田市山内字松原に所在する補陀寺には、「安東下国太郎守季位牌」があり、補陀寺の開基である安東盛季が応永21年（1414）に96才で死亡したと記載されている。安東氏が伐ったとされる、いわゆる「秋田湊」の場所は定かではないが、以上のような記述から、鹿季の頃の応永年間（1394～1428）には、秋田平野に湊安東氏の影響が及んでいたと考えられる。

湊安東氏の居城とされる湊城の築造については、明治期に書かれた『秋田沿革史大成』に「土崎湊城ハ百三代後花園帝永享八西辰年、安倍康季將軍野西北ノ方へ築ク」との記述があるが、この記述自体に根拠はなく、所在・年代ともに不明と言わざるを得ない。<sup>甲20</sup>

その後、安東家は政季（？～1488）が河北郡を得、次代の忠季（？～1511）が檜山城（現・能代市）を居城として築き、檜山安東氏となった。秋田県内には能代の檜山安東氏と秋田の湊安東氏の両家が併存することとなる。元亀元年（1570）頃、愛季（？～1587）が弟・茂季を湊家に送り、両家の統合を図った。しかし、こうした強引な両家統合に湊安東氏側は反発し、天正17年（1589）に、『秋田家文書』の「湊檜山両家合戦覚書」に記されるように、両家の合戦であるいわゆる「湊合戦」が起こる。湊合戦の結果、檜山安東氏の実季（1576～1659）が勝利を收め、その後実季は檜山城から湊城へ居城を移していったようである。『秋田家文書』「御作事入用之目録」などに記されているように、慶長4～6年（1599～1601）に湊城が改修されていることが分かる。改修の内容は、御広間・御奏者之間・角屋倉・御門屋倉・御台所・御鷹部屋・御料理之間・御長屋の作事を行っている。また、改修にかかった費用・人数・材料・日数なども記されており、その内容は大がかりなものである。こうした改修は大規模であり、城の新築に近いとの見解もある（塙谷他1996）。

このような大改修が行われた湊城の所在については、江戸時代中期に書かれた『出羽国風土略記』に、「土崎の湊という當地に城跡あり平城にして水堀二重土手所々にあり大手は辛酉にあり搦手は北に有」と記されており、現在の周知の埋蔵文化財包蔵地としての「湊城跡」はこれを参考に設定されている。

江戸時代に入り、慶長7年（1602）佐竹義宣が常陸国（現・茨城県）より秋田へ転封となり、湊城へ入城する。そして、安東実季は常陸国宍戸へ国替えとなる。慶長9年（1604）には、新築した久保田城へ移り、湊城は破却される。その後、湊城跡周辺は土崎湊として元和2年（1616）に久保田城と土崎湊をつなぐ新道（羽州街道）が整備される。それまでは、久保田城に行くには、土崎湊→八柳→天徳寺門前通り→泉→手形→久保田城というルートであったが、羽州街道が整備されたことにより、土崎湊→寺内→八橋→久保田城というルートとなつたとされている（加藤編1941）。また、元和6年（1620）には、土崎神明社が湊城の跡地（現在地）に移り、土崎の總鎮守となる（秋田市教育委員会編1993）。その後、土崎湊は日本海海運や雄物川船運による物流の要所となり湊町として栄えていく。川口家に伝わる『元文年中湊古絵図』（1730～1740）（第5図）には、江戸期の土崎湊の町割り図などが描かれている。これ

によれば、平成20年度調査区は土崎神明社北東側内堀の外側の一画にあたる。

以上のような、安東氏と湊城跡の概要について年表にまとめると表2のようになる。

表2 湊城跡関係年表

年号	西暦	内容
応永年間	1394～1428	津軽十三湊の安東鹿季が秋田の湊を伐つ。 「鹿季 安東二郎 盛季鹿季に兵二百余の騎を附け、秋田之湊を伐令む、是れ湊家之元祖也。応永三十年六月十六日卒。……」 『秋田家文書』『秋田家系図』
永享8年	1436	湊城が築城される? 「土崎湊城は百三代花園帝永享八酉辰年、安倍康季將軍野西北の方へ築く。」 『秋田沿革史大成 下』
天正17年	1589	湊合戦がおこる。 『秋田家文書』『湊檜山両家合戦覚書』
慶長4年 ～6年	1599～1601	安東実季が湊城の大改修をおこなう。 御広間・御奏者之間、角屋倉・御門屋倉・御台所・御鷹部屋・御料理之間・御長屋を工事した費用・人数・日数等の記述がある。 『秋田家文書』『御作事入用之目録』など 「土崎の湊という當地に城跡あり平城にして水堀二重土手所々にあり大手は辛酉にあり搦手は北に有」『出羽国風土略記』
慶長7年	1602	佐竹義宣が常陸より湊城へ入城。安東実季は常陸国穴戸へ。
慶長9年	1604	佐竹義宣が久保田城へ移り、湊城は破却。
元和2年	1616	久保田城と土崎湊をつなぐ新道（羽州街道）が完成。
元和6年	1620	神明社が湊城の跡地（現在地）に移り、土崎の総鎮守となる。

註1 安東氏に関する家系図はこの他に様々あるが、ここでは、実季の死去の前年（1658）に完成されたとされる

秋田家に伝わる「秋田家系図」を参考した。文献としては、塩谷編1996に所収されたものを参照した。

註2 原文に「永享八酉辰年」とあるが、実際は永享8年は「丙辰」であり、この記述自体の信憑性が問われる。

註3 土崎神明社では大正2年（1913）に300年祭、昭和38年（1963）に350年祭を行っており、土崎神明社の根本の創建が慶長18年（1613）、湊城跡地に社殿等が整ったのが元和6年（1620）とする説もある。（秋田市教育委員会編2002）

#### 【引用・参考文献】

塩谷順耳他 1996 「秋田市史 第八巻 中世 史料編」秋田市

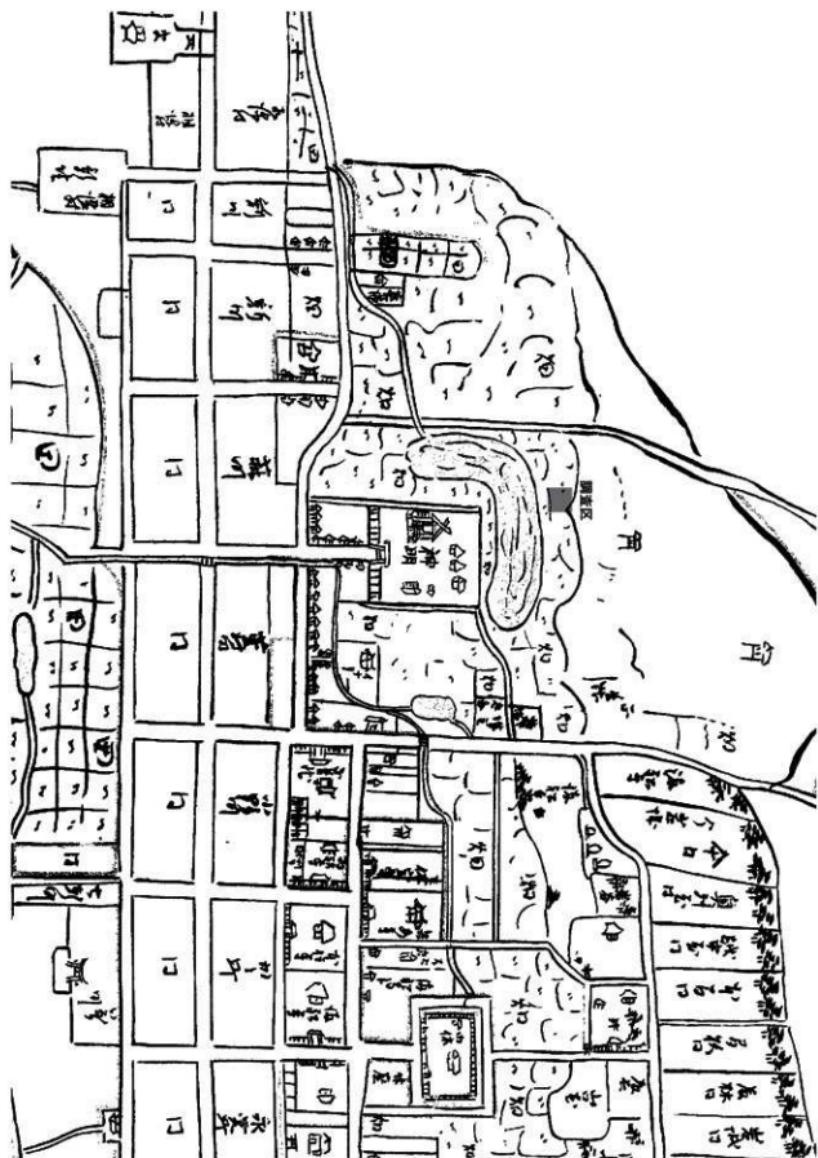
秋田市教育委員会編 1993 「土崎港祭りの曳山行事」

秋田市教育委員会編 2002 「土崎神明社の曳山行事伝承活用テキスト」

加藤助吉 1941 「土崎港町史」秋田市役所土崎出張所

橋本宗彦 1898 「秋田沿革史大成 下」（復刻版 橋本宗彦 1973 「秋田沿革史大成 下」加賀谷書店 所収）

進藤重記 1762 「出羽国風土略記」（進藤重記 1974 「出羽国風土略記」歴史図書 所収）



第5図 元文年中湊古絵図（「土崎港町史」より転載）

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

調査区に一区画  $4 \times 4$  m のグリッドを設定し（第7図）、グリッドの南北軸および東西軸は世界測地系に基づいている。グリッド南北軸に算用数字、グリッド東西軸に2文字のアルファベットを付し、各グリッドの南東隅の交点で両者を組み合わせてグリッド名とした。世界測地系に基づいた座標杭は5点設置し、各座標杭は下記のとおりである。

A : (X = -26,580.000 Y = -65,120.000)、B : (X = -26,576.000 Y = -65,120.000)

C : (X = -26,580.000 Y = -65,116.000)

調査区設定にあたっては、周辺への影響を考慮して境界線から約2 m 離した。また、調査区の東端に土砂運搬用作業スペースを確保した。

遺物の取り上げは、グリッド名・層位名等を記録したグリッド上げを基本とし、適宜、出土地点を記録して取り上げた。遺構平面図・断面図・土層断面図は、1/20の縮尺で作成した。遺構写真は35mm版および6×7プローニー版を使用し、モノクロフィルムおよびリバーサルフィルムで記録した。遺物は調査終了時で、55×34×15cmのコンテナ10箱で、その他一部コンテナに収容できない木製造物がある。遺物は洗浄・接合・注記作業を行い、実測図を1/1で作成した。遺物写真は6×7プローニー版を使用し、モノクロフィルムおよびリバーサルフィルムで撮影した。

### 第2節 層序（第6、8図、図版3、4）

調査区の層序は下記のとおりである。

**第I層（表土）** 碎石駐車場整備の造成土。

**第II層（近代造成土）** 碓に砂利が混じる層、黒色砂（10YR2/1）の黒色石炭残滓層、黒褐色砂（10YR2/2）に明黄褐色砂（10YR6/6）と炭化物が混じる層、暗褐色砂（10YR3/3）に炭化物が混じる層、褐色砂（10YR4/4）に黒色土（10YR2/1）と礫が混じる層、黒褐色砂（10YR3/1）に黒色石炭残滓が混じる層、黒褐色砂（10YR3/1）に褐色砂（10YR4/6）が混じる層、褐色砂（10YR4/6）に褐灰色砂（10YR5/1）と炭化物が混じり、底部に碎石と砂利を多量に含む層が重なり合って第II層を形成している。ガラス製品などの近代製品や多量の黒色石炭残滓が混じっていることから、奥羽本線上崎駅が開業した明治30年代の大規模造成とその後の造成によるものと考えられる。

**第III層（江戸時代後期以降の整地層）** 黒褐色砂（10YR2/2）に炭化物が混じる。江戸時代後期以降の遺構・遺物が確認された。

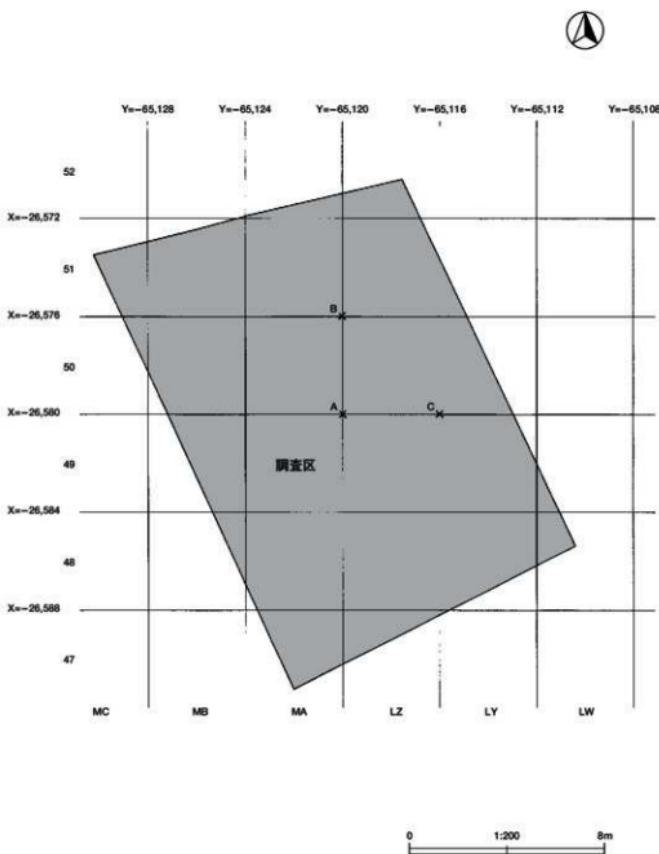
**第IV層（江戸時代の整地層）** 褐色砂（10YR4/4）に灰黃褐色砂（10YR4/2）が混じる。江戸時代の遺構・遺物が確認された。

**第V層** 明黄褐色砂（10YR6/6）。江戸時代の遺物が出土している。

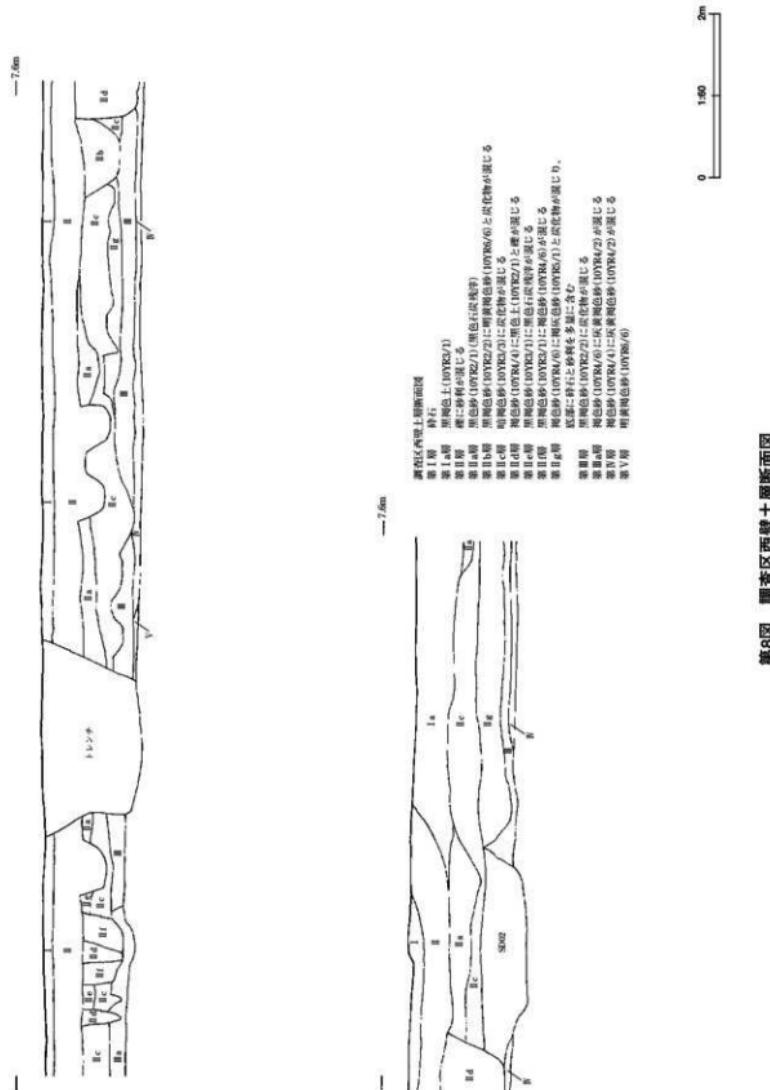


第6図 基本層序柱状図

遺構は、第III、IV層の2面で確認され、各層は人為的に造成された近世の整地層で、10~25cmの堆積



第7図 グリッド配置図



第8図 調査区西壁土壌断面図

が認められる。

### 第3節 遺構と遺物

遺構は第Ⅲ、Ⅳ層の2面で確認された(第9、13図)。以下、各層ごとに検出された遺構・遺物について述べる。

#### (1) 第Ⅲ層面検出の遺構・遺物

第Ⅲ層面からは、柱列1条(SA01)、溝跡3条(SD01~03)、土坑2基(SK01、02)、畝跡(SX01)、ピット1個(P01)が検出された。また、遺物は遺構内および第Ⅲ層から、陶磁器・瓦・金属製品・木製品などが出土した。

#### 柱列

##### 1号柱列(第10図、図版5)

調査区南側で検出した。東北~南西方向の柱列で、2個のピットから柱痕が確認されたが、南西側は調査区外に延び、付近は擾乱されている部分が多く、他のピットは確認できなかった。柱間は2mで、柱掘り方の直径は30~40cm、確認面からの深さ9~19cmである。

#### 溝跡

##### 1号溝跡(第10図、図版5)

調査区南側で検出した。南北方向の溝で、南側は調査区外に延びる。幅約12cm、確認面からの深さ約11cmで、断面形は鍋底状を呈する。2号溝跡・1号畝跡と重複し、2号溝跡と同時期で1号畝跡より新しい。溝の側面と底面に腐食した植物痕が確認され、側壁に板材を組んでいたと考えられる。

#### 出土遺物

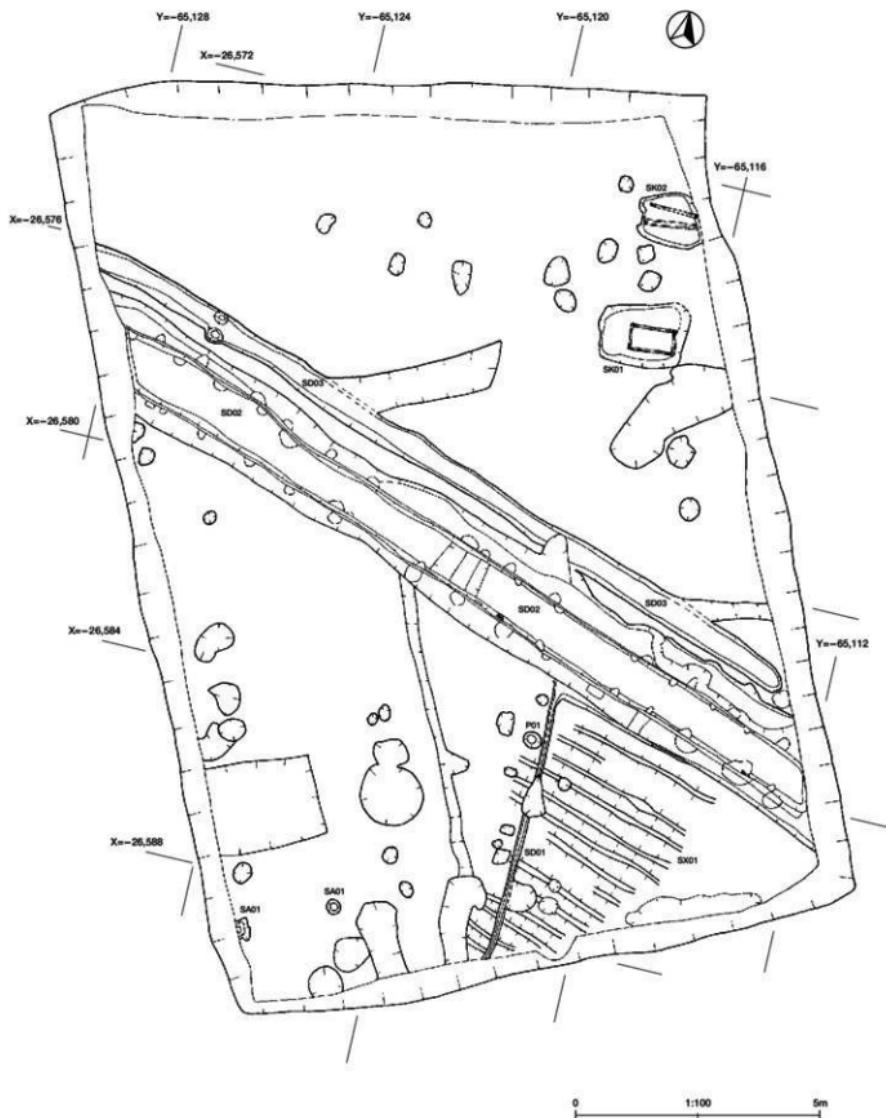
金属製品(第21図1、2、図版13): 1、2は溝の壁際出土の釘である。

##### 2号溝跡(第11図、図版5)

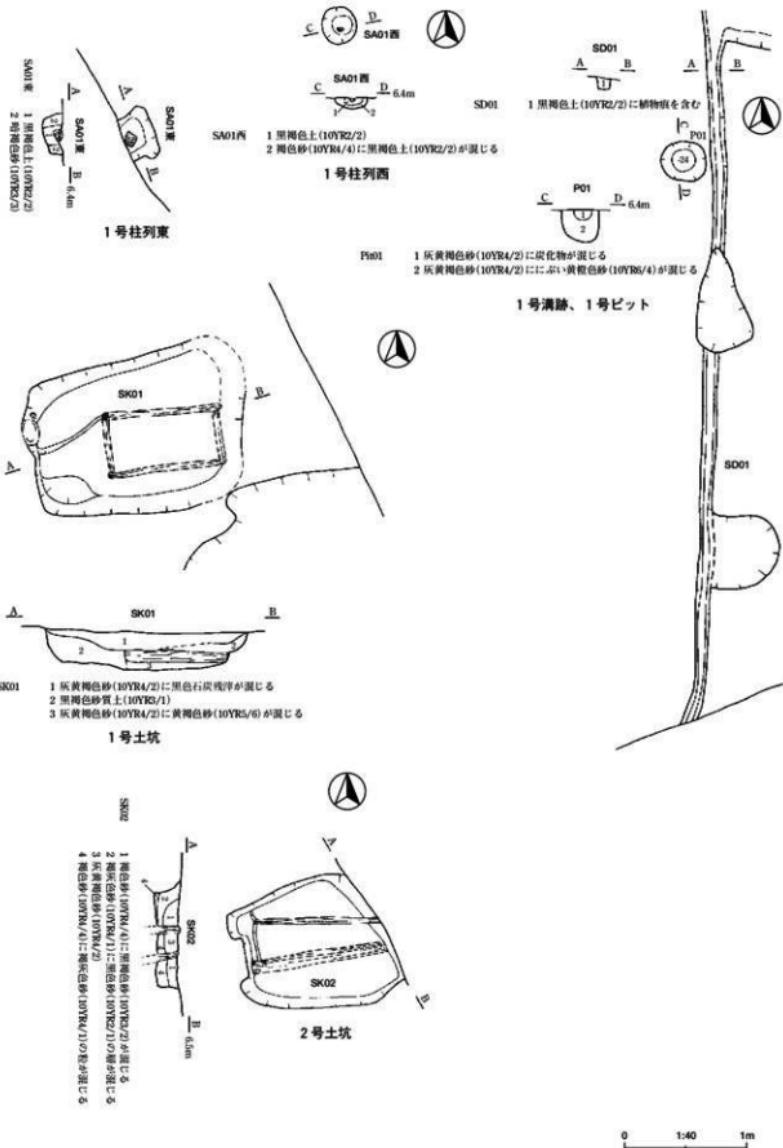
調査区中央で検出した。東西方向の溝で、調査区外に延びる。幅は確認面が1.9~2.1m、底面が約1mである。確認面からの深さは35~70cmで、断面形は逆台形状を呈する。1号溝跡・1号畝跡と重複し、1号溝跡と同時期で1号畝跡より新しい。両側壁には板材が確認され、板材の両側を直径約15cmの杭で補強しており、間隔は1~1.1mである。溝理土は、腐植土と黄褐色砂の互層が検出面まで統き、上方の埋土には近代のガラスや黒色石炭残滓などが混じっていた。板材外側の埋土は、地山とその上の層の砂が混じったもので、酸化鉄を含んで固い層になっていた。本溝跡は第Ⅲ層で検出後、第Ⅳ層精査途中で溝跡が外側に広がるため、何回か作り直されていたと考えられる。遺構発年代は、内側埋土から奥羽本線上崎駅が完成した明治40年代以降と推測される。また、表土剥ぎの前に同じ場所で同じ方向にU字溝が確認されたことから、最近まで形を変えながら水路として使用されていたと考えられる。

#### 出土遺物

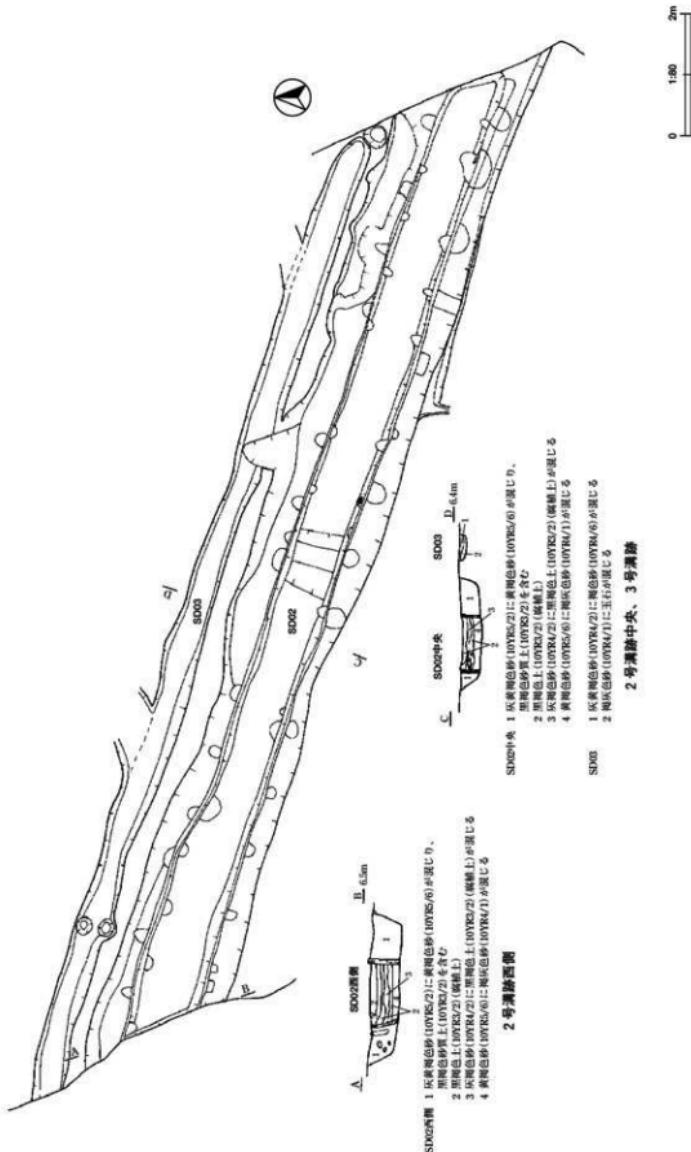
陶磁器(第17図1~4、図版8): 1~4は埋土出土である。1は肥前系磁器染付碗で、外面に蝶文



第9図 第Ⅲ層遺構全体図



第10図 第Ⅲ層検出遺構（柱列、溝跡、土坑、ピット）



第11図 第Ⅲ層検出遺構（溝跡）

を染め付けている。2は瀬戸美濃系磁器染付小碗で、焼締痕がある。3は在地窯の寺内焼と思われる磁器染付湯飲み碗で、外面に漢詩を染め付けている。4は肥前系磁器染付端反り碗蓋で、内外面に桜を染め付けている。

金属製品（第21図3、図版13）：3は埋土出土で、用途不明の鉄製品である。

### 3号溝跡（第11図、図版5）

調査区中央部で検出した。東西方向の溝で、2号溝跡と平行する形で確認され、間隔は約25cmで、調査区外に延びる。幅40~65cm、確認面からの深さ約12cmで、断面形は鍋底状を呈する。歎跡と重複し、それより新しい。出土陶磁器より、遺構廃絶年代は19世紀代と考えられる。

#### 出土遺物

陶磁器（第17図5~7、図版8）：5~7は埋土出土である。5は肥前系磁器染付皿である。6は肥前系磁器染付鉢である。7は肥前系磁器染付皿で、内面に植物文を染め付けている。

#### 土坑

##### 1号土坑（第10図、図版5）

調査区北側で検出した。平面形は長方形で、規模は長軸1.8m、短軸1.3mで、確認面からの深さは38cmである。壁は急に立ち上がる。遺構内の東側に長軸96cm、短軸52cm、深さ19cmの長方形で底板のない木枠が組まれている。出土陶磁器より、遺構廃絶年代は19世紀後期以降と考えられる。

#### 出土遺物

陶磁器（第17図8~10、図版8）：8~10は埋土出土である。8は産地不明の磁器染付碗で、外面に銅板刷りで丸文を染め付けている。9は産地不明の磁器鉢で、内外面に瑠璃釉を施している。型打ち成形で、内面に茄子を表し、器全体で茄子の花を表現している。10は肥前系磁器染付蓋物である。

##### 木製品（第21図1、図版13）

1は埋土出土で、先端部が尖り、根元には銅製の鉗が打たれているが、用途は不明である。

##### 2号土坑（第10図、図版6）

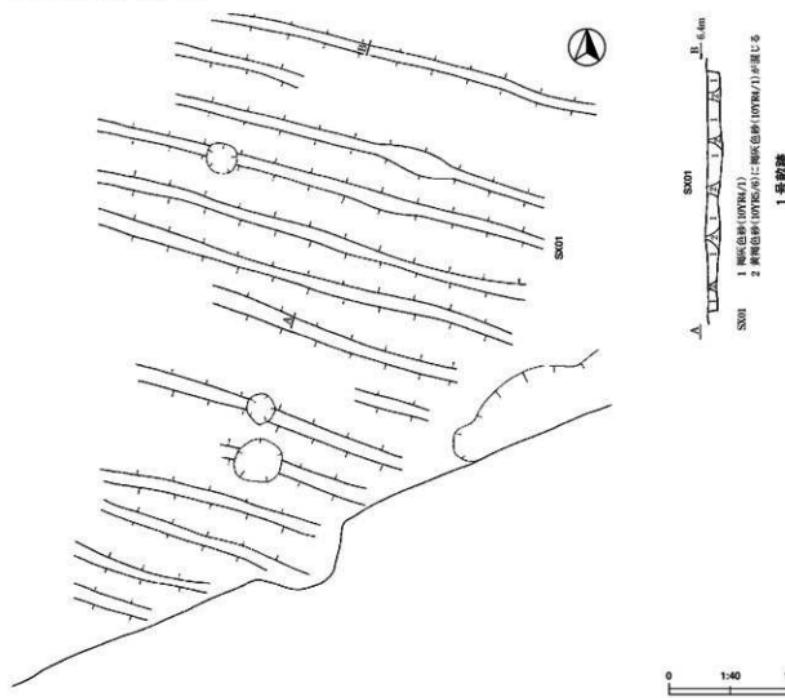
調査区北側壁沿いで検出し、東側は調査区外に延びる。平面形は長方形と考えられ、規模は長軸1.3m以上、短軸1.1mで、確認面からの深さは24cmである。壁は急に立ち上がる。内部には長軸106cm以上、短軸28~46cm、深さ19cm以上で、底板のない木枠が組まれている。出土陶磁器より、遺構廃絶年代は19世紀代と考えられる。

#### 出土遺物

陶磁器（第17図11、図版8）：11は埋土出土である。肥前系白磁皿で、型打ち成形である。

##### 1号歎跡（第12図、図版6）

調査区の南東側で検出した。東西方向の歎跡で、規模は長さ3.2~3.6m、幅22~34cm、確認面からの深さ12~14cmで、断面形は鍋底状を呈する。1号溝跡と2号溝跡と重複し、これらより古い。出土陶磁器より、遺構廃絶年代は19世紀前期と考えられる。



第12図 第Ⅲ層検出遺構（跡）

#### 出土遺物

**陶磁器**（第17図12、図版9）：12は埋土出土である。肥前系磁器染付皿で、内面に丸文と網目文を染め付けている。

#### 第Ⅲ層出土遺物

**陶磁器**（第18図、図版9）

【陶器】13は陶器である。

（皿類）13は肥前系陶器皿で、砂目積みを施している。

【磁器】14～20は磁器である。

（碗類）14は肥前系青磁染付碗である。15は肥前系磁器染付碗で、外面に鯉を染め付けている。

（皿類）16は肥前系磁器染付皿で見込に五弁花を染め付けている。高台は蛇の目凹型高台であるが、低いのが特徴である。17は産地不明の磁器染付皿である。変形皿で花文を施している。

（瓶類）18、19は肥前系磁器染付瓶である。

（その他）20は肥前系磁器染付仮飯器で、外面に龍を染め付けている。

【土器】21は瓦質土器の鉢もしくは甕で、口縁外側に花を型押している。

陶磁器の年代は、おおむね18~19世紀であり、第Ⅲ層はこの時期に形成された整地層と考えられる。

## (2) 第IV、V層面検出の遺構・遺物

第IV、V層面からは、溝跡4条(SD04~07)、土坑2基(SK03、04)、ピット8個(P02~09)が検出された。また、遺物は遺構内および整地層である第IV、V層から、陶磁器と金属製品が出土した。

### 溝跡

#### 4号溝跡(第14図、図版6)

調査区中央で検出した。南北方向の溝で、調査区外に延びる。幅1~1.3m、確認面からの深さ約38cmで、断面形は鍋底状を呈する。2号溝跡と重複し、それより古い。出土陶磁器より、遺構廃絶年代は19世紀前期と考えられる。

### 出土遺物

陶磁器(第18図22~25、図版9、10): 22~25は埋土出土である。22は肥前系磁器染付碗である。23は産地不明の磁器染付碗で、外面に蝶を染め付けている。24は肥前系磁器染付皿で、口縁外面に白化粧を施している。25は肥前系磁器色絵仏飯器である。

#### 5号溝跡(第14図、図版6)

調査区中央東側で検出した。南北方向の溝で、調査区外に延びる。幅2.2~2.8m、確認面からの深さ36~56cmで、断面形はU字状を呈し、溝の中央部がさらに深くなっている。2号溝跡と重複し、それより古い。出土陶磁器より、遺構廃絶年代は19世紀前期と考えられるが、歓跡を掘り下げた後に検出されており、出土品の一部は、烟を構築した際に混ざり合ったと考えられ、遺構廃絶年代は歓跡構築以前と推測される。

### 出土遺物

陶磁器(第18、19図26~29、図版10): 26~29は埋土出土である。26は肥前系磁器染付碗である。27は瀬戸美濃系磁器染付小碗で、外面に松文を染め付けている。28は肥前系白磁皿で、型打ち成形し、口紅を施している。29は肥前系磁器染付蓋物で、外面に雪の輪文を染め付けている。

金属製品(第21図4、図版13): 4は埋土出土の釘で、曲っている。

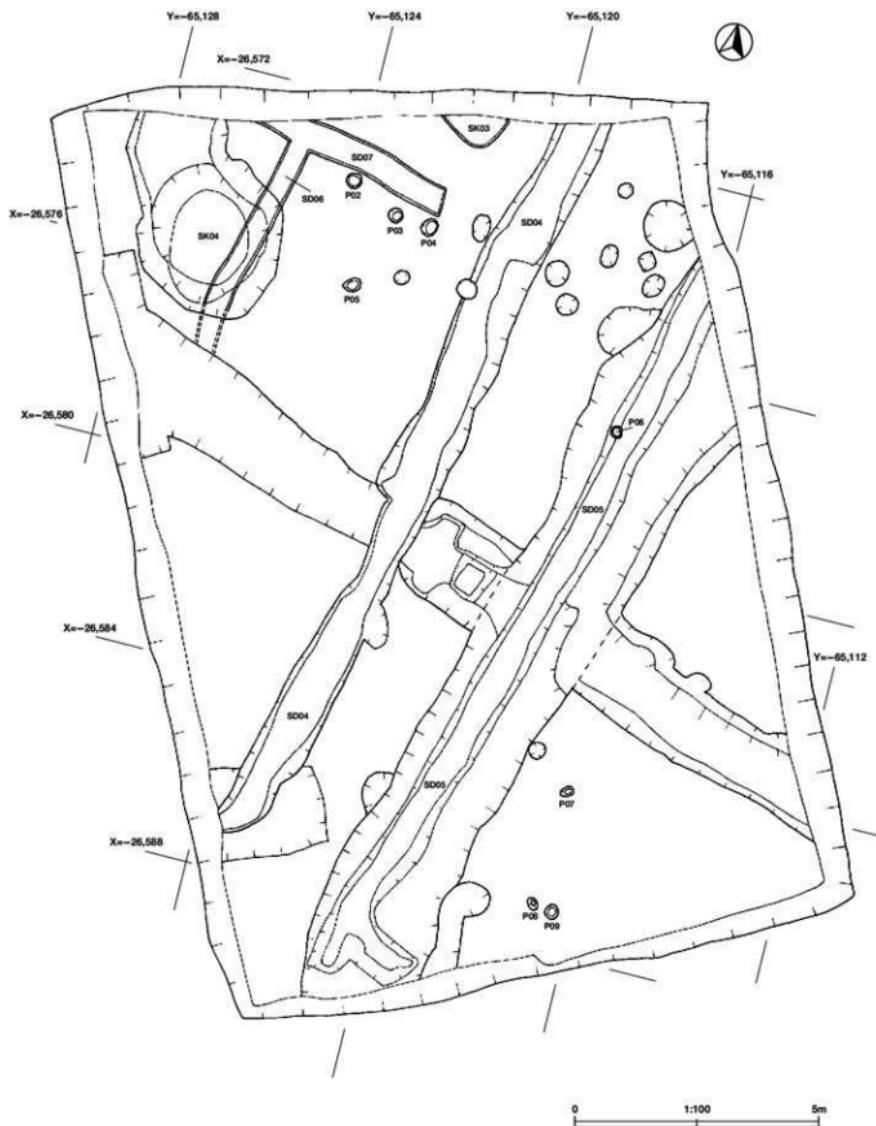
#### 6号溝跡(第15図、図版7)

調査区北西側で検出した。南北方向の溝で、北側は7号溝跡と重なり、南側は2号溝跡と重なっている。幅約49cm、確認面からの深さ約11cmで、断面形は鍋底状を呈し、底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。2、7号溝跡、4号土坑と重複し、2号溝跡より古く、4号土坑より新しい。7号溝跡とほぼ同時期に構築されたものと考えられる。

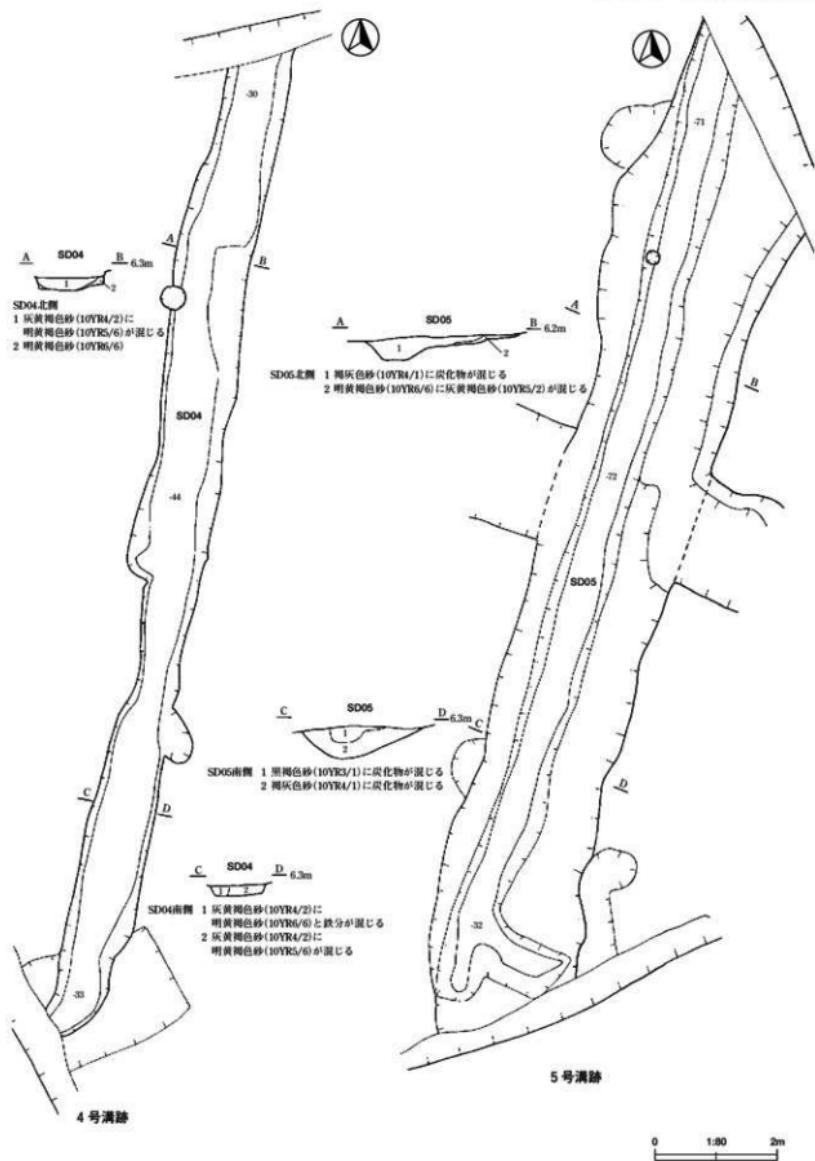
金属製品(第21図5、6、図版13): 5、6は埋土出土で、5は釘、6は折釘である。

#### 7号溝跡(第15図、図版7)

調査区北西側で検出した。東西方向の溝で、西側は調査区外に延びる。幅56~66cm、確認面からの



第13図 第IV層遺構全体図



第14図 第IV層検出遺構（溝跡）

深さ約7cmで、断面形は鍋底状を呈し、底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。6号溝跡と重複し、ほぼ同時期に構築されたものと考えられる。

## 土坑

### 3号土坑（第15図、図版7）

調査区北側で検出した。北側は調査区外に延びる。平面形は不明で、規模は長軸1.4mで、確認面からの深さは32cmである。断面形は鍋底状を呈し、壁は急に立ち上がる。

### 4号土坑（第16図、図版7）

調査区北西側で検出した。北側は調査区外に延びる。掘り方平面形は不整形で、規模は長軸4.5m、短軸3mで、確認面からの深さは34cmである。断面形はU字状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。中央底部から直径約2cmの灰青色粘土の固まりが検出された。6号溝跡と重複し、それより古い。

## 出土遺物

陶磁器（第19図30、図版10）：30は埋土出土である。肥前系磁器染付皿で、内面に窓絵を染め付けている。

## 第IV、V層出土遺物

陶磁器（第19図、図版10、11）

【陶器】31、35は陶器である。

（皿類）31は瀬戸美濃系陶器皿で、内面に菊花が形取られている。

（その他）35は産地不明の陶器擂鉢で、内外面に鉄釉を施している。

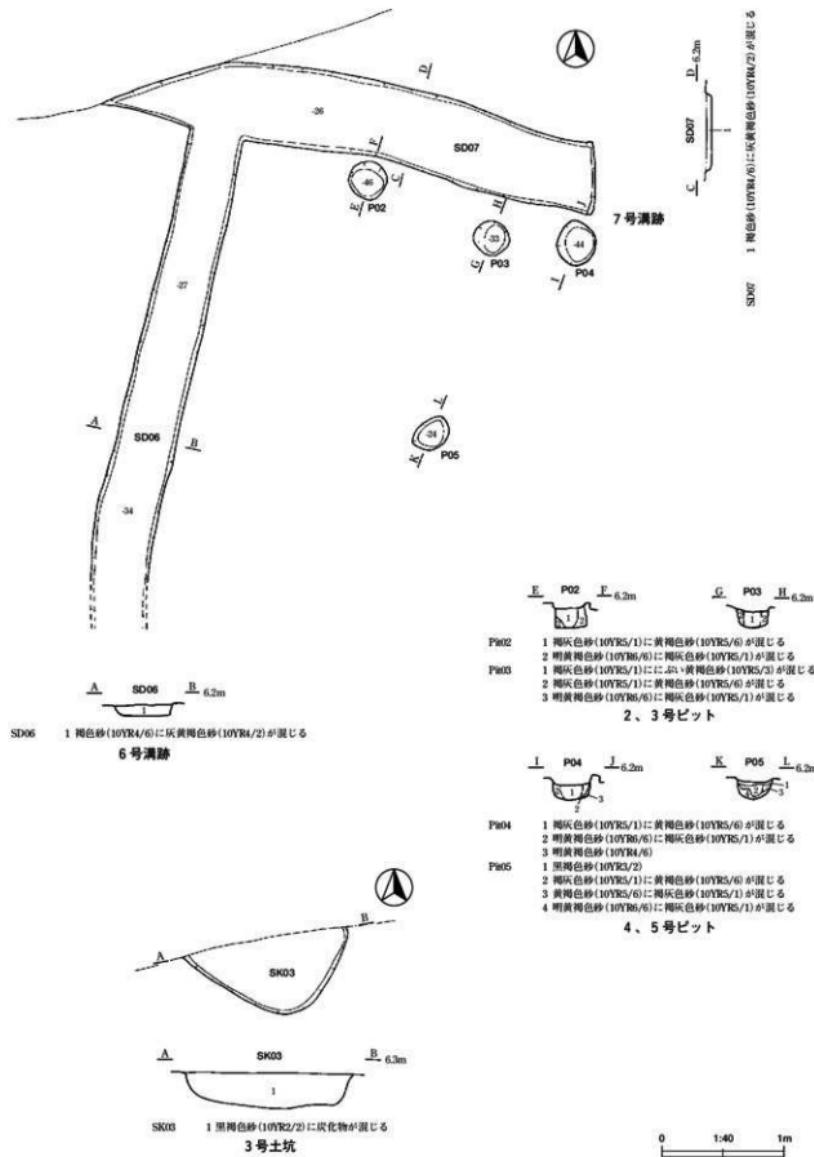
【磁器】32～34は磁器である。

（皿類）32は肥前系磁器染付筒形碗である。33は肥前系磁器染付広東碗である。

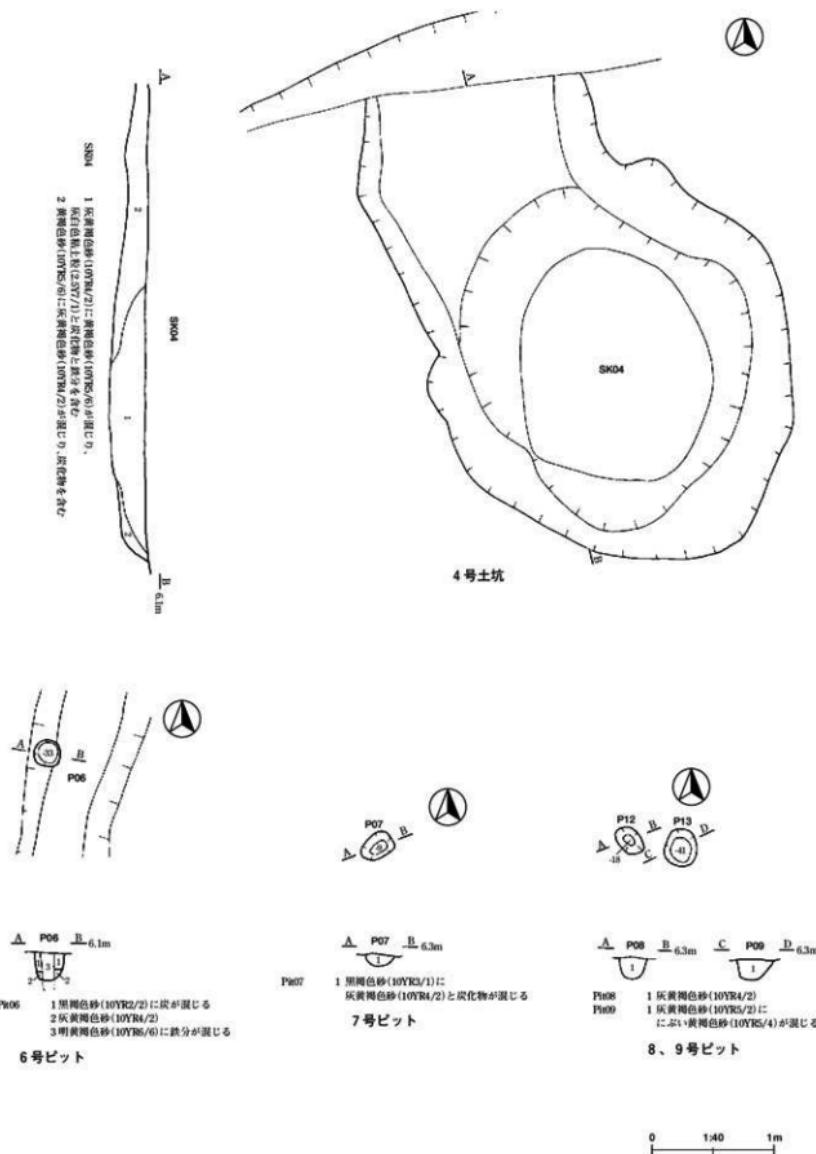
（皿類）34は肥前系磁器染付皿である。見込にコンニャク印判で五弁花を染め付け、高台内に「大明成化年製」の文字を染め付けている。

陶磁器の年代は、おおむね18世紀～19世紀初期であり、第IV、V層はこの時期に形成された整地層と考えられる。

第I～II層で出土した遺物については、出土遺物属性表と実測図のみで説明する。



第15図 第IV層検出遺構（溝跡、土坑、ビット）



第16図 第IV層検出遺構（土坑、ピット）

## (3) 出土遺物属性表および実測図

表3～7、第17～21図に出土遺物の属性表および実測図を掲載した。表3～7の凡例は下記のとおりである。

## 凡例

- 1 陶磁器・土製品・瓦・金属製品・木製品の基本分類ごとに番号を付与した。
- 2 国番号は、実測図の番号と一致している
- 3 陶磁器について、分類では陶器・磁器に分類を行った。また、施釉や絵付けにより染付・青磁・白磁・色絵等の細分が可能な場合、「特徴」欄に記載した。
- 4 陶磁器では、肥前系・瀬戸美濃系など主要な大規模生産地（地方）に関し、その生産地のものを中心として、それに直接技術的影響を受けた周辺および地方の窯のものも含め「系」として示した。また、より具体的な生産地として窯を限定できるものについては、秋田の在地窯の寺内窯のように示した。
- 5 陶磁器の年代については、年代を限定できるものについては西暦の年代で示した。また、窯を限定できるものについては、生産・操業期間に基づき年代を示した。

表3 土製品属性一覧

番号	国番号	出土地点・層位	分類	器種等	素材	特徴
1	第21図	擾乱	土製品	泥面子	土師質	兔の耳つき
2	第21図	第Ⅱ層	土製品	人形の型	土師質	恵比寿
3	第21図	第Ⅱ層	土製品	泥面子	土師質	花

表4 瓦属性一覧

番号	国番号	出土地点・層位	器種等
1	第21図	SK02埋土	桟瓦（いぶし瓦）

表5 金属製品属性一覧

番号	国番号	出土地点・層位	器種等	素材
1	第21図	SD01埋土	釘	鉄製
2	第21図	SD01埋土	釘	鉄製
3	第21図	SD02埋土	不明	鉄製
4	第21図	SD05埋土	釘	鉄製
5	第21図	SD06埋土	釘	鉄製
6	第21図	SD06埋土	折釘	鉄製

表6 木製品属性一覧

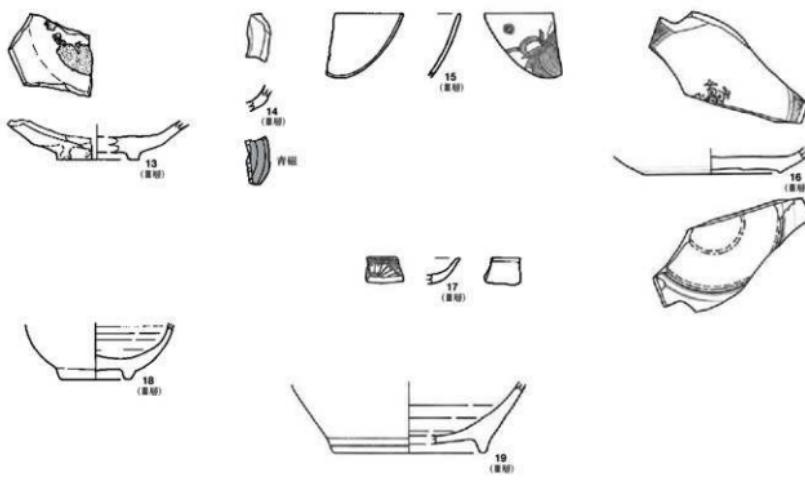
番号	国番号	出土地点・層位	器種等	寸法
1	第21図	SK01埋土	不明	長10cm、最大幅1.4cm、最大厚0.75cm

表7 土器・陶磁器属性一覧

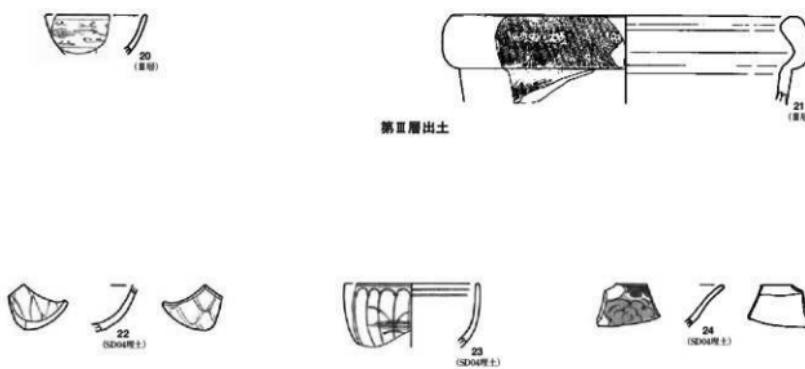
番号	出土地點-層位	グリッド	分類	器種	生産地	年代	特徴
1	SD02埋上		磁器	碗	肥前系	17世紀後期	蝶、染付
2	SD02埋上		磁器	小碗	瀬戸美濃系	19世紀中期	焼麗び、染付
3	SD02埋上		磁器	湯飲み碗	在地窯?	1810-60	渦詩、染付
4	SD02埋上		磁器	端反り碗蓋	肥前系	1810-60	板(両面)、染付
5	SD03埋上		磁器	皿	肥前系	18世紀	染付
6	SD03埋上		磁器	鉢	肥前系	1650代	染付
7	SD03埋上		磁器	鉢	肥前系	1810-60	柄物、染付
8	SK01埋上		磁器	碗	不明	明治以降	銅板刷り、丸文、西洋コバルトで染付
9	SK01埋上		磁器	鉢、向付	不明	19世紀中後期	型打ち成形、腹硝釉、なす、全体もなすの花被熱している。染付
10	SK01埋上		磁器	蓋物	肥前系	18世紀	
11	SK02埋上		磁器	皿	肥前系	1810-60	白磁、型打ち成形
12	SX01埋上		磁器	皿	肥前系	1780-19世紀前期	嗣目文、丸文、染付
13	第Ⅲ層		陶器	皿	肥前系	1610-30	灰釉、砂目積み底
14	第Ⅲ層	LY48	磁器	碗	肥前系(広瀬向)	18世紀後期	外面青磁、内面染付
15	第Ⅲ層	LZ50	磁器	碗	肥前系	1810-60	鰐文、染付
16	第Ⅲ層	LZ50	磁器	皿	肥前系	18世紀末-19世紀前期	手書きの五弁花、蛇の目四型高台、染付
17	第Ⅲ層	LZ50	磁器	皿	不明	19世紀	変形皿、染付
18	第Ⅲ層		磁器	瓶	肥前系	18世紀	染付
19	第Ⅲ層		磁器	瓶	肥前系	1860-70	染付
20	第Ⅲ層	MA49	磁器	仏版器	肥前系	1800-30	龍、文化文政期、染付
21	第Ⅲ層	MA50	瓦質土器	鉢か盤	不明	不明	
22	SD04埋上		磁器	碗	肥前系	18世紀前期	染付
23	SD04埋上		磁器	碗	不明	1810-60	蝶、染付
24	SD04埋上		磁器	皿	肥前系(志田窯)	1810-60	白化粧(口縁外)、染付
25	SD04埋上		磁器	仏版器	肥前系	19世紀前期	色絵
26	SD05埋上		磁器	碗	肥前系	17世紀後期	染付
27	SD05埋上		磁器	小型碗	瀬戸美濃系	19世紀前期	松、草文、染付
28	SD05埋上		磁器	皿	肥前系	19世紀	型打ち成形、口紅、白磁
29	SD05埋上		磁器	蓋物	肥前系	19世紀前期	雪の輪文、染付
30	SK04埋上		磁器	皿	肥前系	17世紀中後期	窓絵、染付
31	第Ⅳ層	MC51	陶器	皿	瀬戸美濃系	17世紀初	菊皿
32	第Ⅳ層	MBS1	磁器	筒形碗	肥前系	1780-1820	底部に唐草文、染付
33	第Ⅳ層	MBS1	磁器	広東碗	肥前系	1800-20	染付
34	第Ⅳ層	MBS1	磁器	皿	肥前系	1680-1740	コンニャク印判、「大明成化年製」銘、染付
35	第V層	LZ48	陶器	擂鉢	不明	不明	外側面に鉄軸
36	表土		陶器	足付きハマ	不明	不明	
37	表土		磁器	小型碗	不明	1810-60	底部に舟?、染付
38	表土		磁器	広東碗	肥前系	1800-30	底部に梵字、染付
39	表土		磁器	皿	肥前系(有田窯)	1740-70	手書き五弁花、渦羅、蛇の目四型高台、漆墨痕、染付
40	表土		磁器	皿	寺内窯	19世紀前期	変形皿、山水文、口紅、染付
41	表土		磁器	水滴	肥前系	18世紀	色絵、鳥を形作っている
42	第Ⅱ層		陶器	灯火具(ひょうそく)	不明	不明	
43	第Ⅱ層		磁器	碗	肥前系	1630-40	染付
44	第Ⅱ層		磁器	碗	不明	明治以降	草文、染付
45	第Ⅱ層		磁器	小碗	不明	19世紀中後期	蕉葉文、口紅、染付
46	第Ⅱ層		磁器	皿	肥前系(有田窯)	1660-70	印字不明、ハリ支え痕、染付
47	第Ⅱ層		磁器	蓋物(段重)	不明	近代	色絵
48	第Ⅱ層		磁器	植木鉢	不明	1810-60	鶴、松、染付



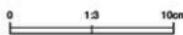
第17図 陶磁器（第Ⅲ層検出遺構内出土）



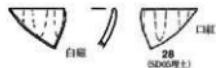
第Ⅲ層出土



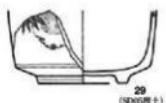
第Ⅳ層検出造構内出土



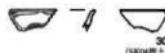
第18図 陶磁器（第Ⅲ層、第Ⅳ層検出造構内①出土）



白磁

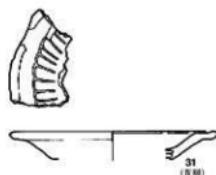


29  
(SD60埋土)

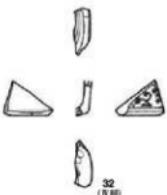


30  
(SK04埋土)

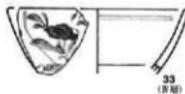
第VI層検出遺構内出土



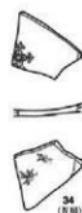
31  
(B層)



32  
(B層)



33  
(B層)



34  
(B層)

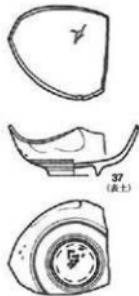


35  
(V層)

第V層出土

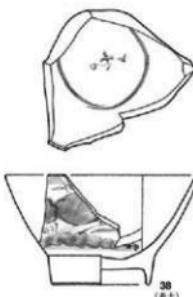


36  
(表土)



37  
(表土)

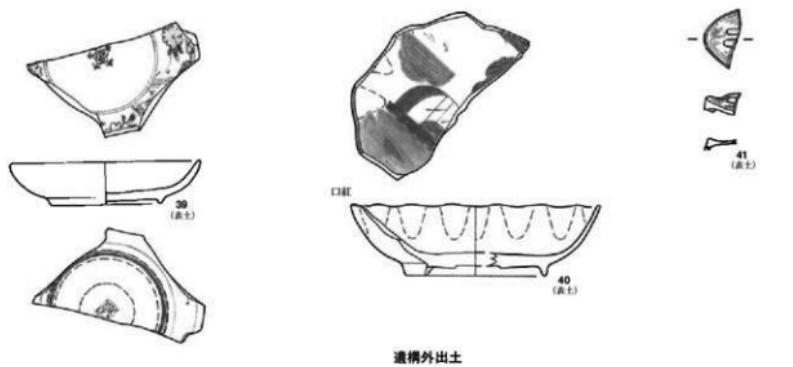
遺構外出土



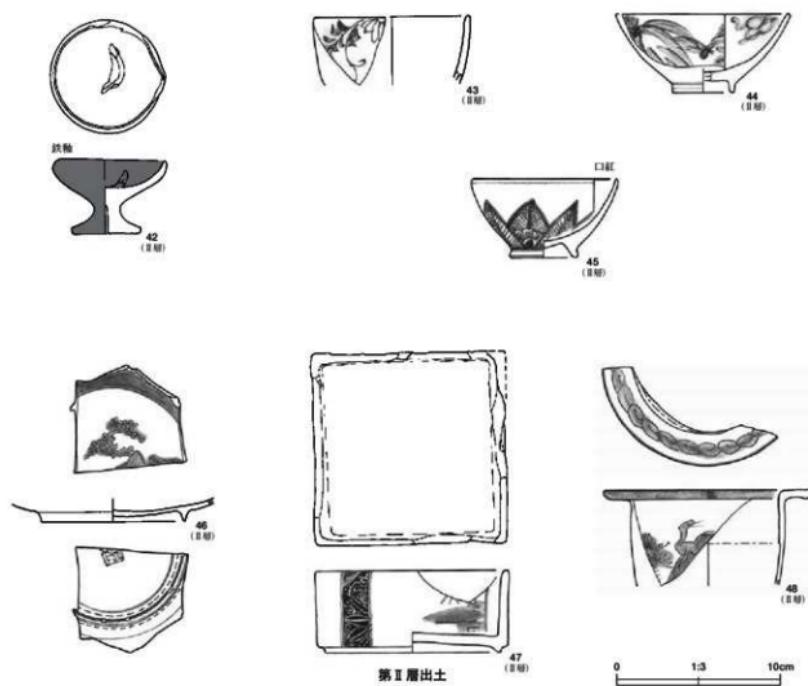
38  
(表土)

0 1:3 10cm

第19図 陶磁器 (第VI層検出遺構内②、第IV、V層、遺構外出土①)

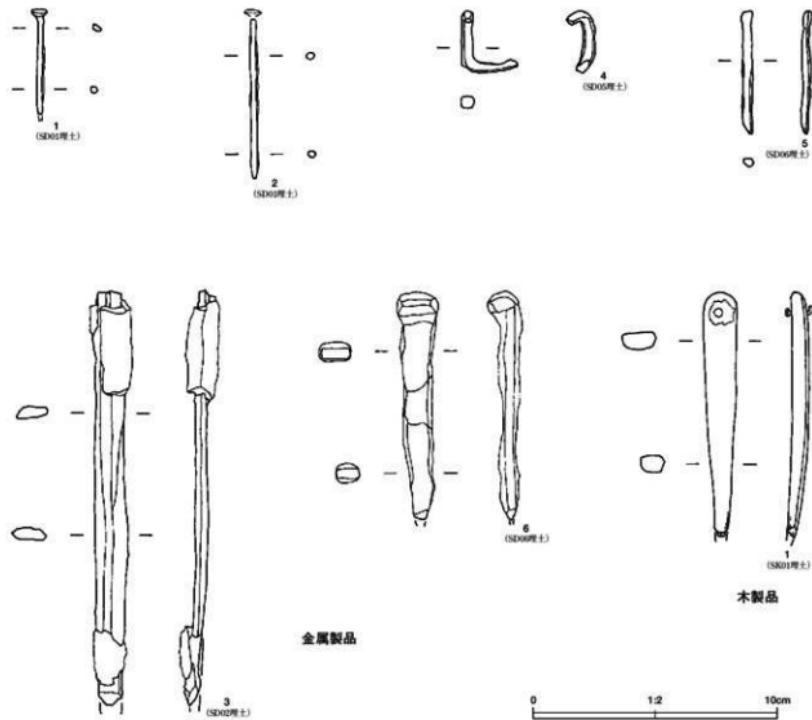
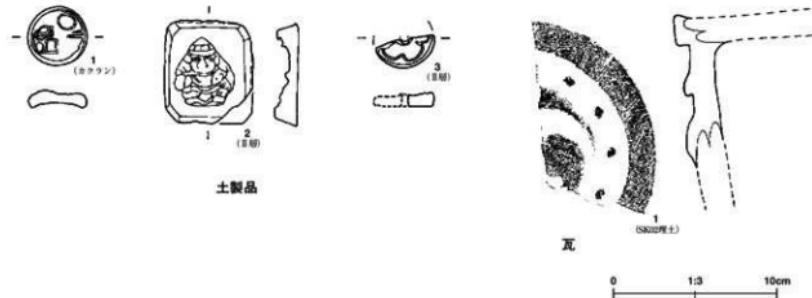


遺構外出土



0 1:3 10cm

第20図 陶磁器（遺構外②、第Ⅲ層出土）



第21図 土製品・瓦・金属製品・木製品

## 第4章　まとめ

### 第1節 検出遺構とその年代について

第Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ層の3面から遺構が検出されたので、各遺構面の遺構配置および出土遺物の年代などから、その性格について考察したい。

#### (1) 第Ⅲ層について

第Ⅲ層からは、柱列1条、溝跡3条、土坑2基、畝跡等が検出された。調査区南東部で認められた、東西方向に延びる溝状の遺構（SX01）は、確認面からの深さ12～14cmで、断面形はほぼ同一のU字状を呈することから、畝の畝跡と考えられる。この畝跡は、平成19年度調査区で発見された畝跡と似ており、同時期のものと推測される。2号溝跡は、1号畝跡とほぼ並行し、調査区中央を東西方向に延び、何度も改修された痕跡がある。両壁に材を組んでいることから、水路として使われていたと推測される。

第Ⅲ層の年代は、出土遺物から18～19世紀で、調査区は『元文年中湊古絵図』（1730～1740年）（第5図）によると畑が描かれている場所であり、この場所が畑として利用されていたことを裏付けるものである。遺構の廃絶年代は明治時代前期頃と考えられるが、この時期にはすでに畑は使用されていなかつたと推測される。

#### (2) 第Ⅳ、Ⅴ層について

第Ⅳ、Ⅴ層からは、溝跡4条、土坑2基等が検出された。4号溝跡と5号溝跡は、調査区中央を南北方向に延び、特に5号溝跡は幅2.2～2.8m、深さ36～56cmと大きいものであるが壁際に組まれた板材や、その板材を支える杭跡などは確認できなかった。5号溝跡は調査区内で最も古い時期に構築された遺構の一つで、水路ではなく境界や区画を示すための溝であったと推測される。また、本調査区東側の平成19年度調査区で検出された4号溝跡と検出状況が似ており、関連した溝跡であるとすれば、周辺一帯に延びる大きな溝跡であったと推測される。

第Ⅳ、Ⅴ層の年代は、出土遺物から18世紀～19世紀初期であるが、第Ⅲ層面の遺構の影響が大きく、第Ⅳ、Ⅴ層面に新しい時期の遺物が混入している可能性が高いことと、畝跡を掘り下げた後に検出された層であることから、『元文年中湊古絵図』（1730～1740年）で描かれる以前と考えられる。

### 第2節 出土遺物について

遺物の種類は、陶磁器・土製品・瓦・金属製品・木製品などが出土している。全体の出土量は、整理作業後の収納時でコンテナ（54×34×15cm）10箱であり、そのうち陶磁器は特に多く9箱で、全体の約90%を占める。種別ごとの機種構成や様相については、以下のように概括される。

#### (1) 陶磁器について

陶器は、灰釉や鉄釉等の施釉陶器などである。磁器は、染付・色絵・青磁・白磁等である。器種構成は、碗・皿・鉢類などの食膳具、瓶・壺類などの貯蔵具、ひょうそくなどの灯火具、仏飯器などの祭祀具などがあり、多種多様なものがみられる。

陶磁器類は年代を問わず生産地の同定が可能なものについて分類を行うと、以下のようになる。

### ①肥前系

九州肥前系地方の窯で生産されたものや、肥前の技術・技法を直接取り入れて生産されたものである。陶磁器の中で最も出土量が多く、大半を占めている。

陶器は、1点のみ出土である。17世紀前期のもので、器種は皿である。

磁器は、17世紀後期の染付碗・皿に始まり、19世紀前期の広東碗、19世紀中期の端反碗までみられる。中でも、18~19世紀代の碗・皿が最も出土量が多い。器種構成としては、碗・皿・鉢・瓶・蓋・仏飯器など豊富である。種類は、染付を主体とし、白磁・色絵がある。波佐見周辺の雜器窯の製品が多く、有田周辺窯のものも少量みられる。

### ②瀬戸・美濃系

美濃を含めた愛知県瀬戸地方周辺で生産されたものである。

陶器および磁器が少量出土している。陶器は皿で、17世紀初期のものである。磁器は碗で、19世紀のものである。

### ③寺内窯

秋田市寺内所在の在地の地方窯で、白岩窯から工人が移動し天明7年（1787）に陶器生産を開始したとされる。天保8年（1837）頃には肥前の技術を間接的に導入し、磁器生産も開始したとされる（小松・日野1991）。明治初め（1870年前後）頃まで操業した。磁器染付皿が出土しているが、19世紀前期のものである。

以上のことから、各遺構面および遺構内出土遺物は肥前系陶磁器が主体となる。平成17~19年に行なった調査区と比較すると、中国産貿易陶磁器・瀬戸美濃系陶磁器・肥前系陶器の出土量が非常に少ない傾向が見られる。これは、調査区が湊城の内堀外側の北東部にあたること、江戸時代以降肥前系の陶磁器が日本海側の流通の中心となったことと合わせ、近世土崎湊に関連する遺構のみが存在することを裏付けている。

## 第3節 湊城について

本調査区の第Ⅲ層は18~19世紀、第Ⅳ、Ⅴ層は18世紀以前の遺構面であることが分かったが、遺物の出土量が少ないとから時期の特定は困難であった。

平成17、18年度調査区では、湊城関連の遺構や近世の町屋敷跡が確認されており、遺物は15世紀後半~16世紀のものが出土し、中には中国産貿易陶磁器や京都系手づくねのかわらけなど希少価値のあるものが含まれていた。しかし、今年度調査区では、明確に時期や性格を特定できる遺構はなく、遺物の量も少なく、出土した陶磁器は18世紀以降のものが大半を占めている。

これらのことから、今回の調査は湊城の内堀外側の北東部であり、遺構・遺物とともにこれまでの調査に比べて少なく、中世湊城から近世土崎湊の時期を通して居住区域として使用されたのではなく、18世紀から19世紀にかけては畠として使用された土地であったことを確認することができた。このことは、「元文年中湊古絵図」（1730~1740年）（第5図）の資料的価値を高めるものであると考えている。

今後の調査では、周知の遺跡「湊城跡」に湊城が置かれた時期を確認していくとともに、本調査区付近が中世湊城の時代どういった状況であったか、調査していく必要がある。

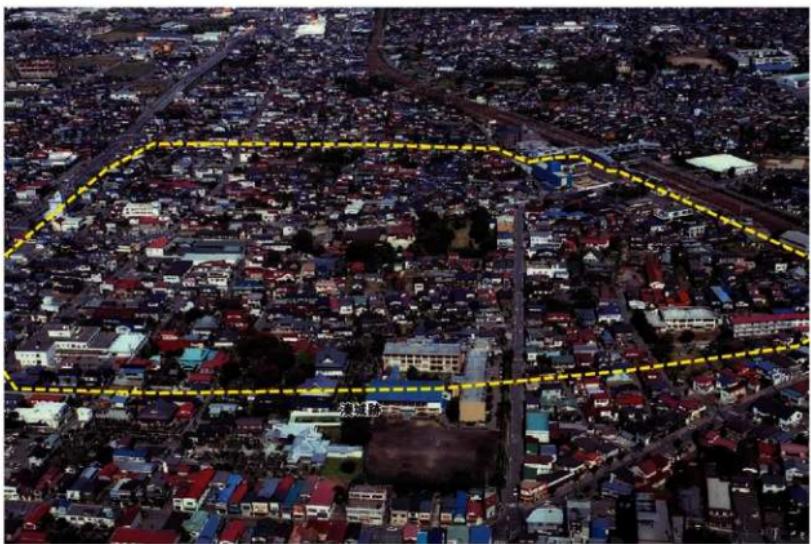
〔第3、4章 引用・参考文献〕

- 江戸跡遺研究会編 2001 「図説 江戸考古学研究事典」柏書房
- 大橋康二 2000 「肥前陶磁」ニューサイエンス社
- 加藤助吉 1941 「土崎港町史」秋田市役所土崎出張所
- 九州近世陶磁学会編 2000 「九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—」
- 古泉弘 1987 「江戸の考古学」ニューサイエンス社
- 小松正夫・日野久 1991 「寺内焼窯跡—寺内小学校建設に伴う近世陶磁器・瓦・煉瓦窯跡の発掘調査—」秋田市教育委員会・秋田城跡調査事務所
- 利部修 2006 「久保田城跡・藩校明徳館跡—秋田中央道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一」秋田県文化財調査報告書第412集 秋田県埋蔵文化財センター
- 利部修他 2005 「東根小屋町跡—秋田県教育・福祉複合施設整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一」秋田県文化財調査報告書第387集 秋田県埋蔵文化財センター
- 塙谷順耳他 1999 「秋田市史 第八巻 中世史料編」秋田市
- 瀬戸市史編纂委員会 1993 「瀬戸市史 陶磁史編4」
- 瀬戸市史編纂委員会 1998 「瀬戸市史 陶磁史編6」
- 瀬戸市埋蔵文化財センター編 2001 「瀬戸大窯とその時代」財團法人瀬戸市埋蔵文化財センター設立10周年記念企画展図録
- 瀬戸市埋蔵文化財センター編 2002 「江戸時代の瀬戸窯」財團法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展示図録
- 瀬戸市埋蔵文化財センター編 2003 「江戸時代の美濃窯」財團法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展示図録
- 瀬戸市埋蔵文化財センター編 2004 「江戸時代の瀬戸・美濃窯」財團法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展示図録
- 瀬戸市埋蔵文化財センター編 2006 「江戸時代の瀬戸・美濃—三都と名古屋—」平成17年度瀬戸市埋蔵文化財センター企画展示図録
- 田口昭二 1983 「美濃焼」ニューサイエンス社
- 東北陶磁文化館編 1987 「東北の近世陶磁」
- 東北中世考古学会編 2003 「中世奥羽の土器・陶磁器」高志書院
- 東北中世考古学会編 2005 「海と城の中世」高志書院
- 安田忠市他 2002 「藩校明徳館跡—市街地再開発事業に伴う発掘調査報告書一」秋田市教育委員会

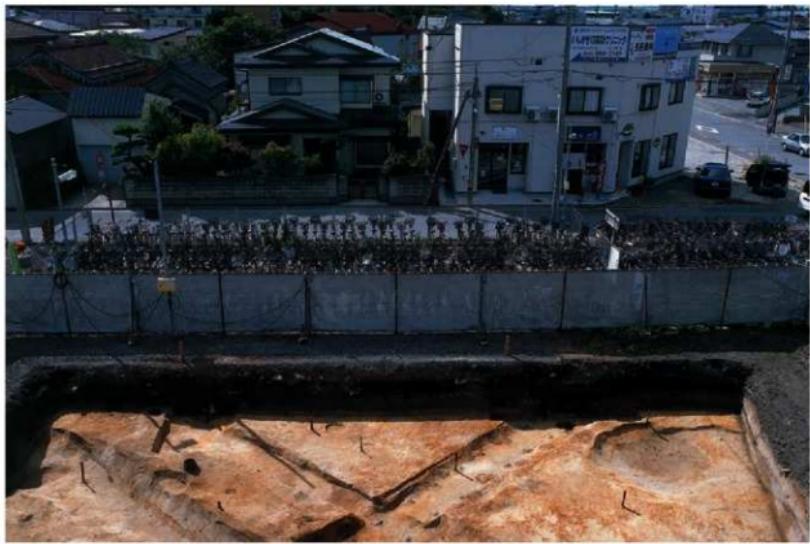
写 真 図 版



漆城跡遠景（南東から）



漆城跡全景（南から）



調査地全景（東から）



第Ⅲ層全景（東から）



第四層全量（東から）



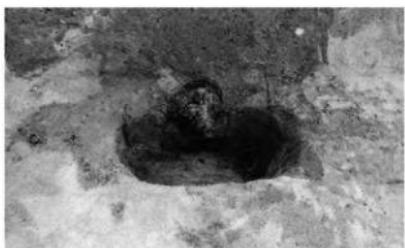
調査区北壁土層断面（南から）



調査区西壁土層断面（東から）



出土遺物



1号柱列調査状況



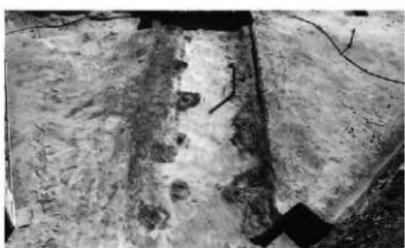
1号溝跡完掘状況



1号溝跡完掘状況（拡大図）



2号溝跡調査状況



2号溝跡内杭出土状況



2、3号溝跡完掘状況（南東から）



2、3号溝跡完掘状況（北西から）



1号土坑完掘状況



2号土坑調查狀況



第III層歟跡調查狀況



第III層歟跡出土狀況



4号溝跡調査狀況



4号溝跡完掘狀況



5号溝跡調査狀況



5号溝跡完掘狀況



4、5号溝跡完掘狀況



6号溝跡完掘状況



7号溝跡完掘状況



3号土坑調査状況



4号土坑完掘状況



第Ⅳ層全景（東から）



1~11 陶磁器（第Ⅲ層遺構内）



図版9 12 陶磁器（第Ⅲ層遺構内）、13～21 陶磁器（第Ⅲ層）、22 陶磁器（第Ⅳ層遺構内）



23



24



25



26



27



28



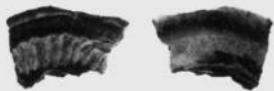
29



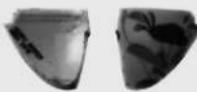
30



32

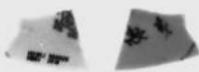


31

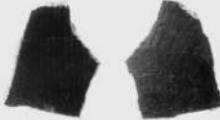


33

23~30 陶磁器（第IV層遺構内）、31~33 陶磁器（第IV層）



34



35



36



37A



38



37B



39A



40



39B

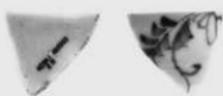
34 陶磁器（第IV層）、35 陶磁器（第V層）、36~40 陶磁器（遺構外）



41



42



43



44



45



46A



47

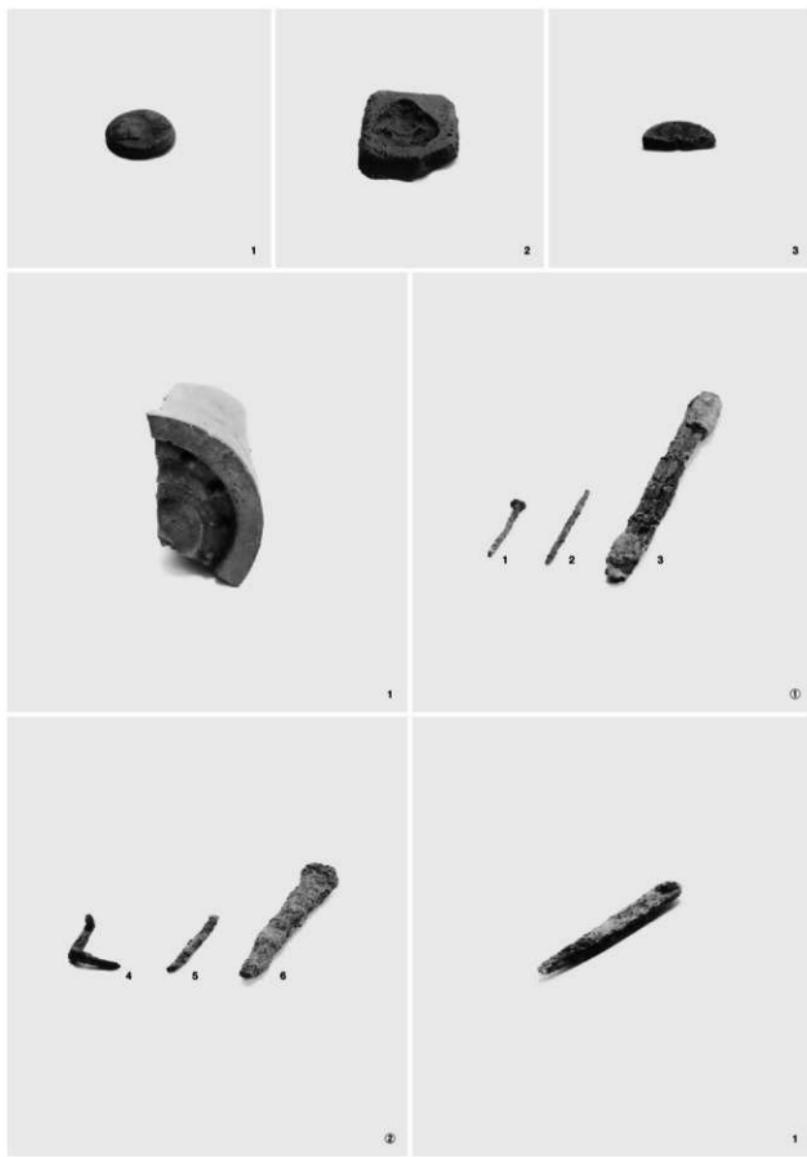


46B



48

41~48 陶磁器（遺構外）



1～3 土製品（遺構外）、1 瓦（第Ⅲ層遺構内）、①・② 金属製品。1 木製品  
図版13

## 報 告 書 抄 錄

---

秋田市  
湊城跡

—秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴う発掘調査報告書（平成20年度調査区）—

発 行 平成21年10月  
編 集 秋田市教育委員会  
〒010-0951  
秋田市山王二丁目1番53号 山王21ビル内  
TEL 018-866-2246 FAX 018-866-2252  
印 刷 有限会社 タイヨー商会

---